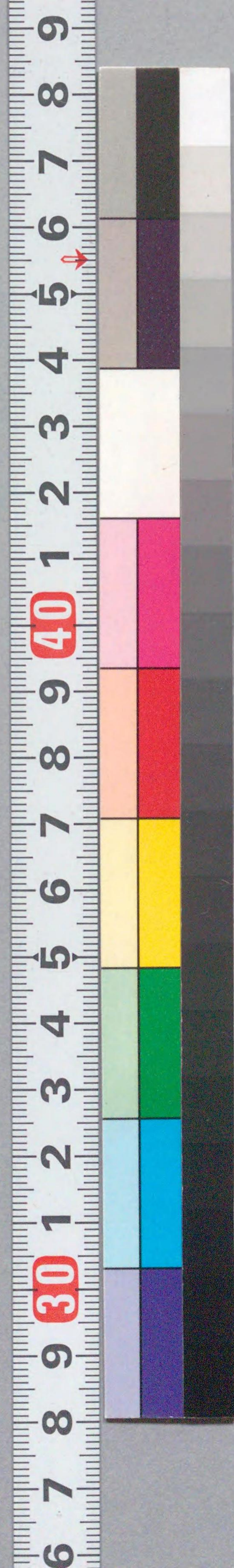


208  
合1  
162

仙家花

上下

蘭  
書  
集



国立国会図書館 仙物語仙家花 2巻 208-162

ガラス使用





水  
吉  
經  
五  
巻

208  
2  
162

国立国会図書館 杣物語仙家花 2巻 208-162

ガラス使用





文 化 戊 辰 新 鑄

東都南山笑楚滿人遺稿

仙物 語家 花仙

全部二卷

序文 山東京傳題

卷首画 歌川豊國筆

總画 歌川國貞筆



江戸高砂町  
伊賀屋勘右衛門  
繡梓發兌

題小説儂家花首

三

書林大野屋  
本町七丁目

凡<sup>おと</sup>紳<sup>ま</sup>史<sup>し</sup>の著<sup>ちやう</sup>迹<sup>じゆつ</sup>み。酒<sup>さけ</sup>あり糟<sup>うも</sup>あり。其<sup>その</sup>

酒<sup>さけ</sup>を<sup>を</sup>解<sup>と</sup>す。其<sup>その</sup>糟<sup>うも</sup>ハ<sup>は</sup>膏<sup>こう</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>す。

故人<sup>こじん</sup>南<sup>なん</sup>仙<sup>せん</sup>笑<sup>しょう</sup>仙<sup>せん</sup>人<sup>にん</sup>先生<sup>せんせい</sup>其<sup>その</sup>酒<sup>さけ</sup>み<sup>み</sup>解<sup>と</sup>す。

城<sup>しろ</sup>の<sup>の</sup>そ<sup>そ</sup>。其<sup>その</sup>糟<sup>うも</sup>以<sup>も</sup>膏<sup>こう</sup>を<sup>を</sup>事<sup>こと</sup>と<sup>と</sup>為<sup>な</sup>す。

四<sup>よ</sup>十<sup>じゅう</sup>年<sup>ねん</sup>矣<sup>や</sup>。已<sup>すで</sup>に<sup>に</sup>復<sup>また</sup>讎<sup>あだ</sup>の<sup>の</sup>紳<sup>しん</sup>史<sup>し</sup>と<sup>と</sup>作<sup>つく</sup>て。

写



遂つひみ其糟そのくそをして又ひとみ嘗あめ志むるみいらる予

いまづ其酒そのさけの意味いと知しる事を得えば漸あや

其糟そのくそ故ゆゑ嘗あめて僅わずかみ解ある身

最もつと耻はむ事の至いたる事。近あり日文ぶん象さう堂どうの主あ

先せん生の遺い稿こうを得えて梓あみのをとる事と思おも

是これ死しる事孔明こうめいが家て釀ぶらうの酒さけを以もて生な

仲ちゆう達たつ故ゆゑ醉ある事計けい策さくと功こうをめす

嗚あ呼あ先せん生の醉ある事没む後ごに到いたり醒

美び酒さけ有ある事哉や

文化丁卯秋八月

山東京傳述



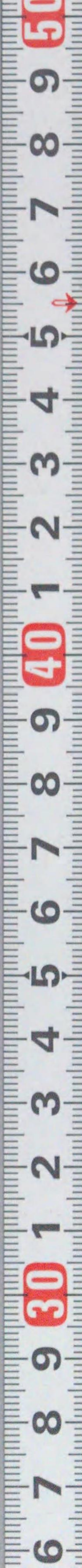




義夫惣太郎  
 煉子其角  
 煉子其角の足  
 ちびと



備後国遊君和歌芝  
 藻の花戸 変林こ由  
 けさの  
 むらめ  
 岸  
 笑み







以上四張曲豆園画





6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50

南山笑稿 仙家花目録

上之卷

下之卷

○和久田三太夫婿女蛾進  
 ○小馴深事  
 ○蛾進魏王之后鄭氏故事  
 ○引諛言事  
 ○和久田妻子離縁第三作  
 ○追出事  
 ○蛾進連子身持放埒之事  
 ○花田村老女櫻恨述懷事  
 ○白秋種次郎和久田三太夫と圖討事

○和哥芝惣太郎歎悟事  
 ○白秋種次郎叔父甥惣太郎と海沉事  
 ○井口惣太郎獲生歸國事  
 ○三作物太郎途中大風雨宿借事  
 ○蛾進身上懺悔尼成事  
 ○三作物花惣太郎歎白秋種次郎討事  
 目録終

仙家花卷之上

戲作南仙笑楚滿人

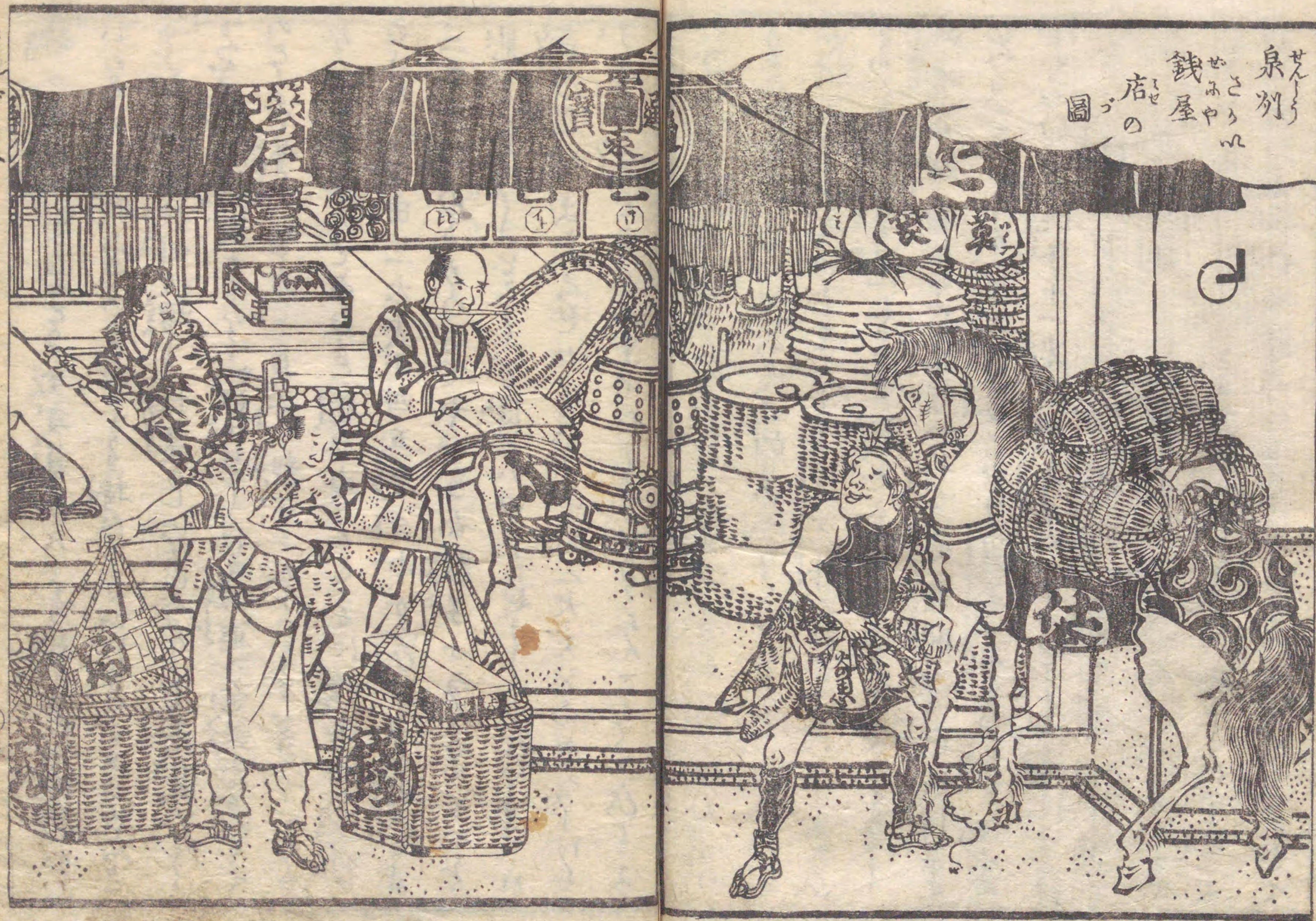
和久田三太夫婿女蛾進小馴深事

文明なる者伯耆のと小旭が崎といふ所小和久田三太夫といふのあり父祖某ハ名和長年が旗下少て官方一陣の將が長年討死せし後子息長生と不和少て領地へ引こり催豆小應せむとされし心をもひるごとく其子三平吉野殿の御味方として時乃いれとまらける小南朝御和睡のつて天下將軍乃下知小あささひける時乃管領大内家和久田が武勇をととたるとゆゑたびく味方小まのんきう〜とあり〜が三平きくぬれう所領とを郷士とどなるふる其孫三太夫いいまど若年少て父母小











姉が金銀とわんえと今度暮方乃と買ひし田島を  
いの色が印形ふくのうたうら拂ひまかひのふまのとき  
やうたうら夜姉が塚より持来しぬるのころど葛籠乃ま  
るぎ出し何國をもなくかけやりしける城進ハ金銀ぬるまで  
のころど等ふぬとあそび色今親子か命つるどまててても  
わくつらせんとおたを迷ひぬるあるに種次郎手習  
のころ和久田三大夫ふ四五度手本りひとく出入せ  
三大夫情あるりのあてやりぬ女親子かちんまていを  
見ふとくくまて目とかけつらせしうたうらま  
昔乃人だまをせやまててけ三大夫とあやうら  
子乃手豆とのばんまてやうらひりらんとくくびどよ

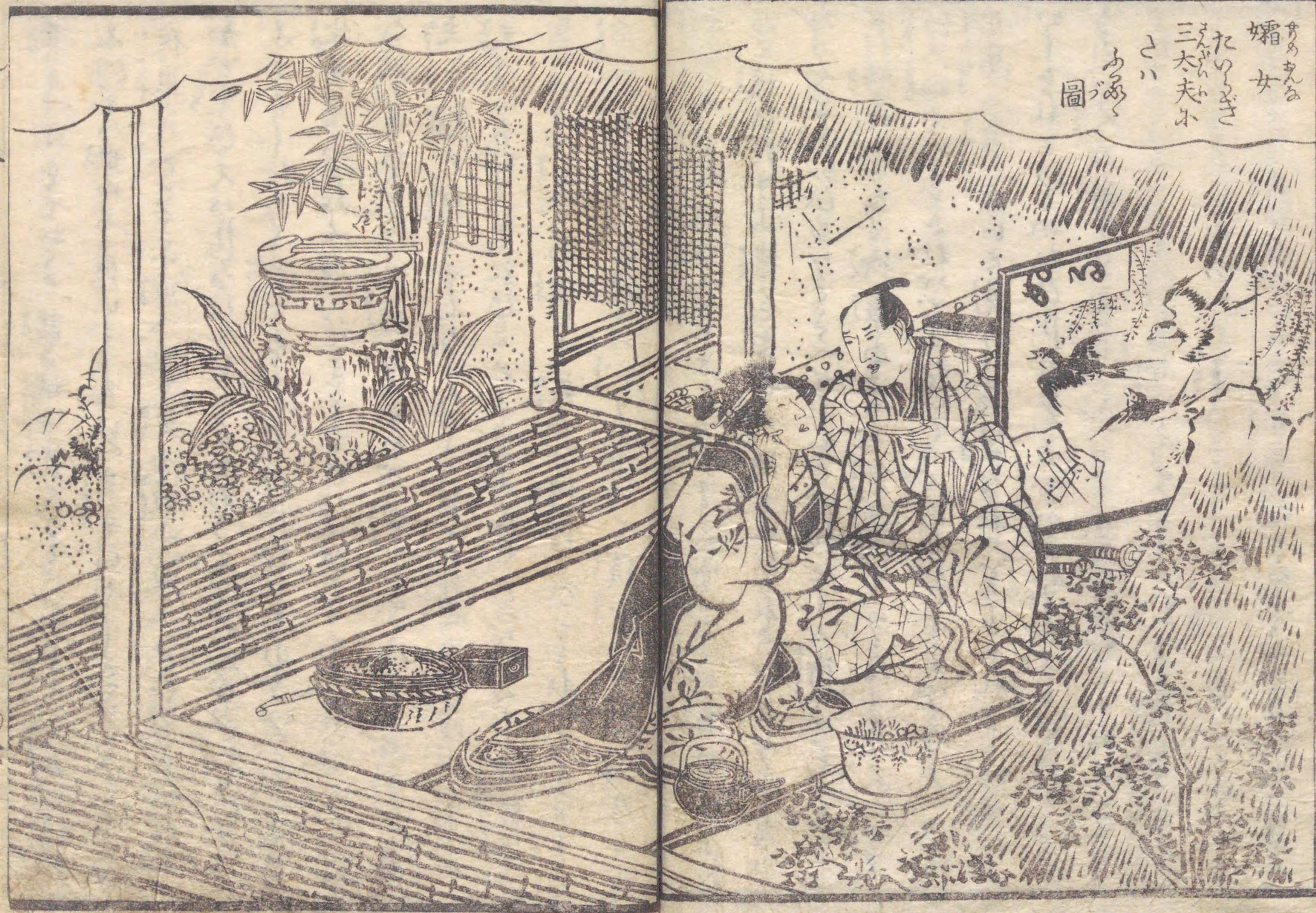
さまめくわてか酒なご出して酔ふまうせていやらしき風情  
と見せうける元来少くさのりハとごすたごをうらま  
ゆづりなぬ女乃とそ入水わぶ乃風情三大夫ふところり  
うどと手入豆入ら乃かご小や一夜あう二夜宿しける  
かご小城進ふたしをうされてさしと恪色多し三大夫  
ゆまを金銀とあう好めるあふとあう親子安樂小  
くさくさやう少を賄ひらる

城進魏王之后鄭氏之故事と引譏言之事  
されば城進ハ昔遊女ぬとあなく乃人とたがうたごこ小妙を  
ゑて三大夫とくく乃手まごのりてあやかしくなるおま  
かふるなんひ小育る正どきなる心うけをぬり









おのゝちの  
婿女  
たのしき  
三太夫  
こい  
あはれ  
圖













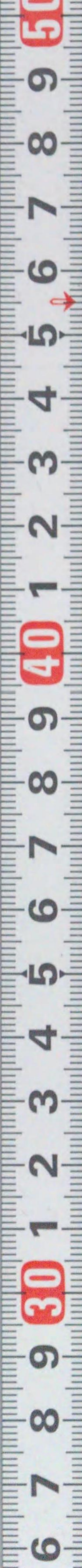
三太夫  
木影小  
身と  
志の  
曇る





ある小其夜和久田三太夫ハ、  
尾ふるんとりひ、詞ふたぐり、  
ワヤハ、心よ一物ゆれ、  
外よりけいご、  
かてワ、家乃やうと、  
三作、  
まの夜、  
乃金銀、  
あつめ、  
ての、  
さむら、

ある小其夜和久田三太夫ハ、  
尾ふるんとりひ、詞ふたぐり、  
ワヤハ、心よ一物ゆれ、  
外よりけいご、  
かてワ、家乃やうと、  
三作、  
まの夜、  
乃金銀、  
あつめ、  
ての、  
さむら、

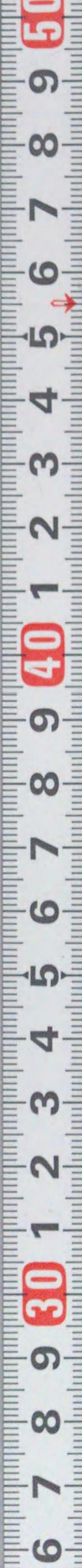




六牧屏風とさふいかけ其下とらり裏口より小げいでーが  
所詮とや思ひらん其行方とあらどまり小る女房小枝の  
けていと見てさそとせいでりびとけいお極る娘花蔓と  
いふはこし肩小かけさとおや乃かへと逃行る三太夫の  
一人の實乃兼あり外に罪なく又女房いささふびとせり  
少しも悪しき事と心よをむ事あらざればおひかけさる  
ころとまてあひ思ひもよとど只太刀風とおはせて逃し是を  
さふあつて兼の勘當に女房いささあつて誰そかむと  
たけとせと妻小せんともり事故とまなりと喜びらる  
小松が親ごといひいとさうり先達てまらりいゆ  
其子原石久兵衛おどろき三太夫がめえとさうりさぬくと

詫して小枝と戻えと詞とつとせとともはひつとふよむと  
花蔓と付離縁状とつとふりける小枝の罪をして去ら  
明暮親子なげさりと原石久兵衛いりけるうらぐさ  
三太夫がいりもつとまらるる再縁とひとんと力とつひけり所  
彼婿女賊進三太夫が妻とつて法専村と引もひかへ  
うりたりと岡合原石とて縁薄くもてうら世話小  
かく思ひ備中乃花田といふ所小母乃妹のれが近きあつた  
居て賊進がうらと岡ん事ゆつと深のえいおのめえへうら度  
うら久兵衛と談合して旅の用意をうら親子備中之國  
へさうりける

賊進が連子種次郎身持放埒の事

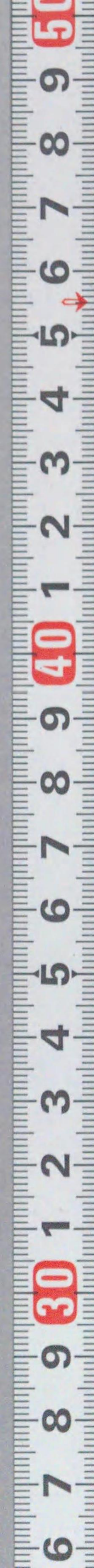






鐘次郎  
故郷  
圖

前後漢書  
其家七書









みどりぐーと打捨ておきけるが三大夫もいふのふざけりある  
ふらりと見のぞくおとこども日く小増長一ころりかけ物よ  
とありいふく金銀をついやりる人これよわんをせんとをれが  
母ハ夫が實子あふぬゆいをも心えひきまゝ不益益はのりく  
三大夫が押手とり出して金銀とかり請物と重くふり入  
あざと今いふともとぶさかろく我家もわづれ秘がふけり  
して志づく友達乃りるまふおまわれわろく大せいの  
借つゝ一訳のた事のころれがつゝ出もありわろくはくぐ  
思ひりる伯父乃鐘巻小兵衛我がごころ道行出来ぬ姉の  
物とかとめさる志あふんして備後乃葦田小遊ゆただんく  
ふのいせうく今やとる相應る身のうとろしうは是へさぶのや

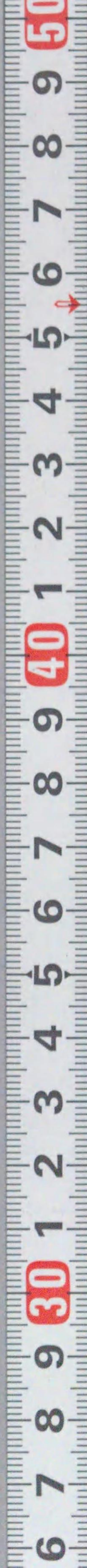
身のおさまると頼さんと俄小思ひ付其夜のうらふうびざらて  
備後の葦田へおもひた伯父が家居と見えはつゝふまごころ  
るまれのいせ下人三四人りつゝひきまゝくゝたてのありやがく  
おとひ入らるんせしふ人喰馬ふも合口とやんかごころた  
時よりあひんがり種次郎ちれが早速請込是より心とわろく  
志んやうとぶさかろくわんおのれごころひ所あれは酒を  
吞せさしおたなる三大夫ハ種次郎かけおちせし日よりまうい日  
所よりさあぐ乃借金さのそく三大夫が押手ふさるおたれが  
いひつけろとわろくはれてわろりるは時よりわろりてまう人ど乃  
女房戀し種次郎が不孝よつて娘をわろくそと  
志んやうが所詮我押手ちれが借金其終ふてはとてわろく







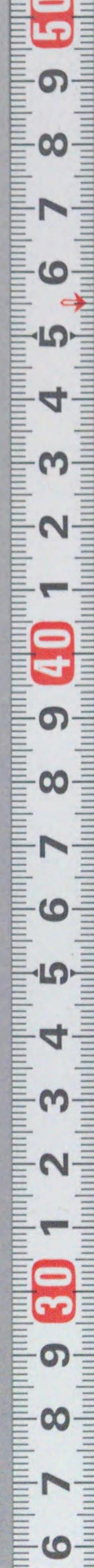






めくくつらむるあり老乃今こそあぐり婆が思入所とまゝに  
ひちせつた春とわらなまらぬれば人乃心おのづかのびやふまら  
咲る花ハ梅乃白やう小果ハめがたき實とむぶとた乃と  
うくくめぐるも日とわらぬれば花りりて何乃あもるしと  
實乃むむびらるど誰ゆけたまんぞ桃ノ柳と心とらけしと  
うるた色よ咲れらふ忍心とためき梅とのひせし事ハはれ  
てワラ九日よりりて實もむむぶら花小くらりてりりふし  
乃あめもあぐ實もるたハたうのさびきむどしとたれくもめ  
あぐあぐし心とらげらけい櫻乃をわらわし補と人乃心迷はる  
事とめくむむしけりつら我めありの心とらけりく女乃ら  
とまらり夫あつて女子一人まらけりこれぞ梅花乃まぶる

盛さたて實とむむびらるあぐりやうと夫とやあむむと花  
ちうららぬらと又わらた咲る櫻よめぐるごとくあぐり女小ら  
つらら我めありの心とらけり又乃夫もわらむと娘とはま  
我とならけ圓へらり明れ夫乃薄情とらけ夫が病とら  
あぐり枕小うしたと其娘あぐり神仏小らりひいのら  
うらんとそのあぐりもあぐり人參とらるあぐりひたつた薬種  
代小身とらたのそまら川よりよまららてびんどのさ人ゆ  
とれども夫まぶのやくとく小や母乃病ハ治せと世とさりあ  
かるかきくある娘とらけりあぐり見る小心りておれとまら  
身もれがせひあぐりならあぐり思小乃とそれハ母よかりのあ  
父小も又あぐりつら其實とまらる梅とさくふとらとせ



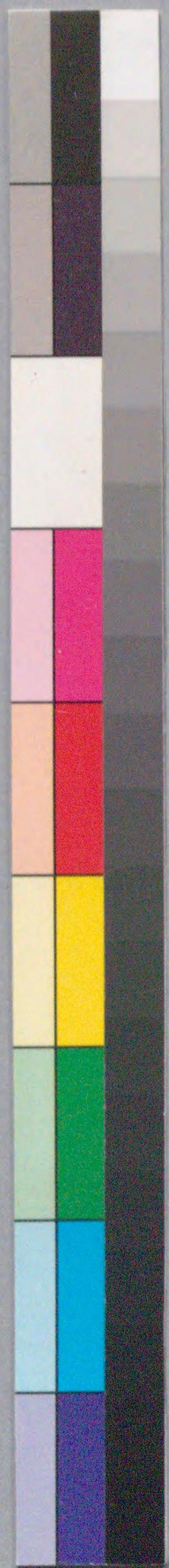
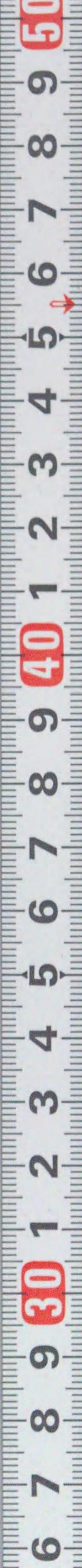


我あはふせいのしと思ひ見わさるるをさるるふかしく  
三大夫をてこし小はあしるふか我身のうまことむ林道うさ  
小松ハ世とさ娘ハ身とさけりてまて地をうくぐ其夫とを我  
言んとせしうささるるうらむらてまてしとさるるふか  
わさる老女ハうさあは櫻とさ旅人ハ足とささるるうさ  
いひけり立とんとせし三大夫某ハ不孝なる子とさるる流浪とさ  
其むとさるるをたぐひまされる孝行と心乃やとさんとてあ  
らふとさるる今度用事ありて備後乃國へかりけりてさるる  
ふれ其むとさたがひて老女乃傳言又書状とささるるあ  
はさるるふさのむとさるる老女はうささるるいひとさるる  
おとさるるもせざれば心むとさるる思ふとされとさるる途中とさ

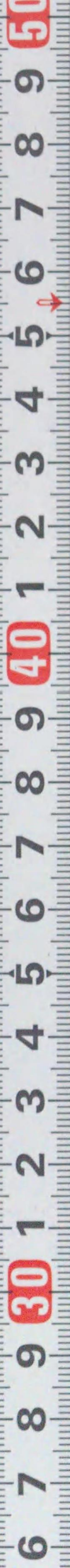
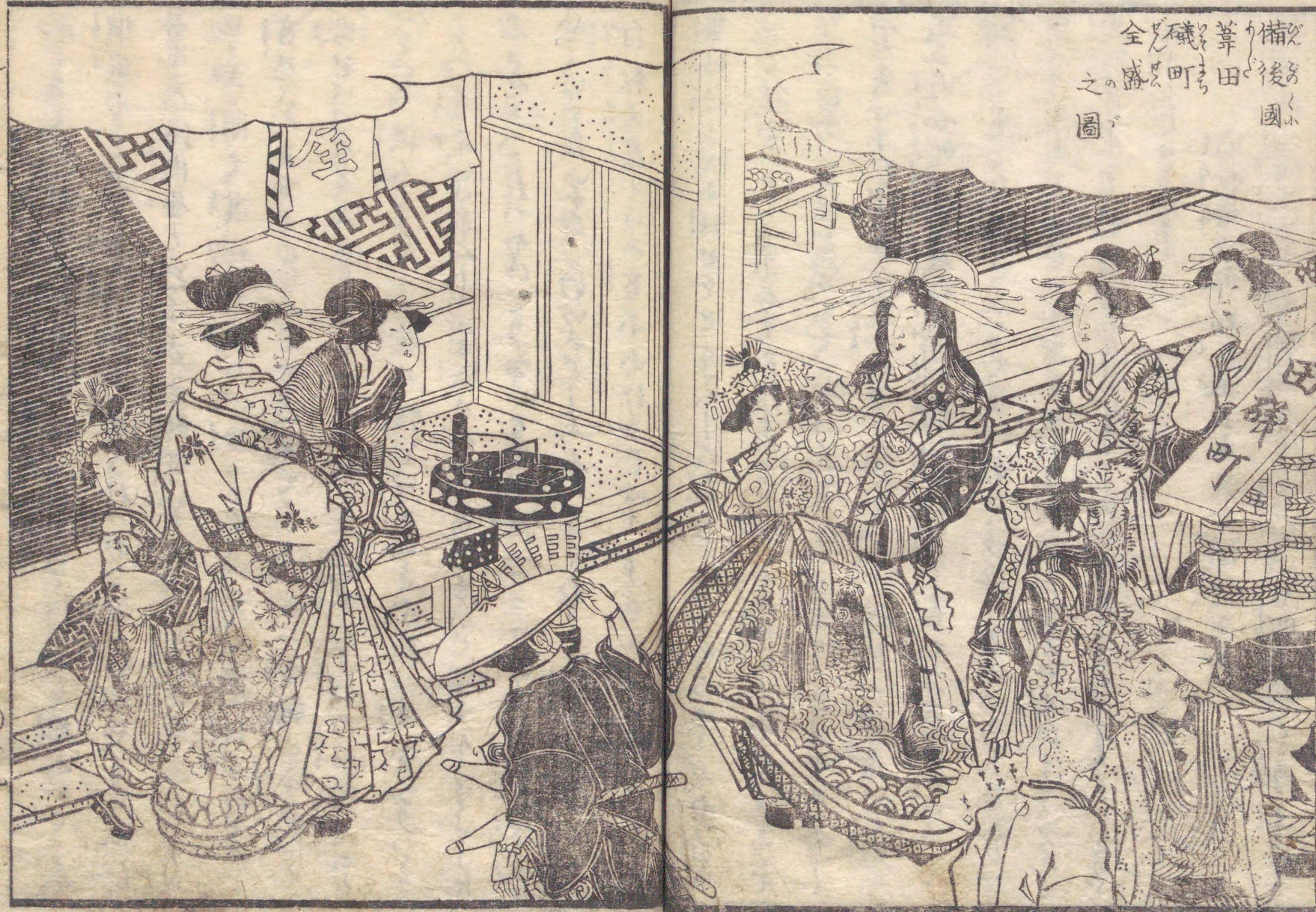
筆紙進も心小仕せどとさるる幸是あやとさるる乃やあつとさ  
さるる紙にてとさるるあたまと懐中より取出しあつとさ  
あつとさるるさるるさるるさるる昔ゆきさるる乃あつと  
三大夫心小んトさる老女ハさるるあかり備後の葦田い町と  
さる遊女町河内屋佐左衛門内和哥芝と書て三大夫小は  
詞乃つてあはるさるる世小あつとさるるさるるさるる  
のさる三大夫心やとさ思ひ玉へさるるあつとさるるさるる  
立別とさるる娘乃ありとさるるさるるさるるさるるさるる  
さるるさるるさるる

白秋種次郎和久田三大夫と闇討之事

くて和久田三大夫備後小下り葦田い町と問く尋来じよ









岡一ふまゝる遊女まらめて四五丁のたどるべおろく都小おどぬ  
倡家ゆまのあり案内ちぬ事なれはる茶店小やまろひは  
會ん乃河内屋しつる方小和哥芝とつる遊女ありやとつ  
亭主聞て其和哥芝は里一むん乃全盛あて引手あまこよ  
客乃こまかしくとら入三太夫聞てうれ女ハ金銀ぞ小おや  
出せばつる人小もまきゆと岡一我小とた乃田舎人小も  
一もの酒をこく一夜乃情とゆきとさやされは其事ありと  
く首尾つるこく三太夫さわら其あひとやんりこてては  
忍させ玉これいひひとつ多とて小根ニつ三つあふれば亭主  
おしとたつとだつとせつとあづくくあつて立ちり今日を  
白秋大盡とい人客小わけし心よまきせむとの事又きひての

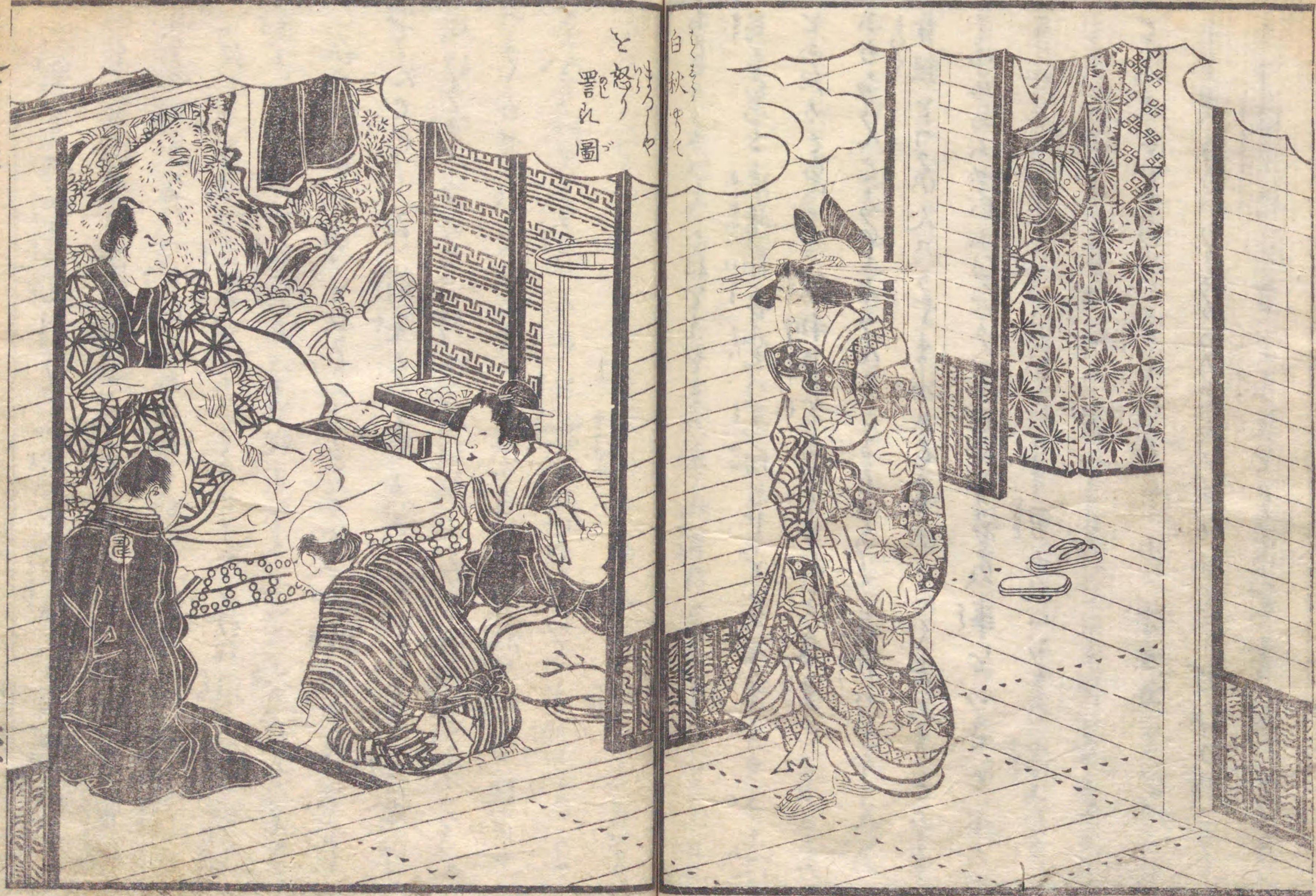
おがしめ一立ふあ一玉とまき乃とく不不あいらを三太夫はひて  
客人おちのひぬれがせひる事さうあつたまらよ小あなつ  
思へ我る人よとさかかりりのありをけたまはれとて彼老女  
あをさうつら一れば亭主らう思へも和哥芝がたへあ  
文と出しかやうくとつ入と和哥芝はと一目見ておろあ  
母乃おをが手跡あつことづてもまきとらとらとらとらとらと  
御氣乃とくあつたればん小りて何とぞ其御心あておん  
ゆせをさうとつと乃あいら三太夫あてとらとらとらとらと  
らうともたのめんせんと茶屋うわんあいあてやとらとらとらとら  
こひあつた女ゆく夜乃ふらう夜をまらわらうららと和哥芝が  
あこらとて菓子かどおろおしつけおん目小あつとつとつと



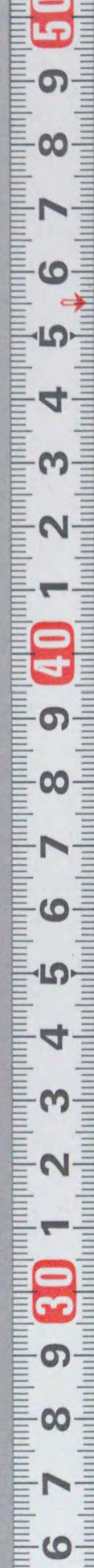








と怒り  
白秋  
罰丸  
圖





去年より和哥芝小より余が金銀をつひ捨合てん  
かきあつていなるはこれとも男がうとらめいまで當世  
うの生もあれが女郎あどのとくおとまりとらん小  
白秋弥  
せれこきぬら金銀をつひとせしとまけ道乃りのを  
金つくとるたえりのを我よおとらぶ茶やらのや  
ひつけ惣太郎とせくべしとらぬ金とまたら  
せんとせし茶屋くろやもさくらこれまで惣太郎  
ぬけあつたつひとけ金銀おろつひりの也今より  
つらもせられどことよ人のひらりのあれが何ともひ出を  
おろりぬ今宵も白秋とあらひおくさしきよ  
なつらうともおとらぬ客名代とらぬ是三太夫より

和哥芝の白秋がどしきよぬら惣太郎と其ま  
ゆいおたが又母のむがみ持来してとらぬ客よのひ  
ことづてもはなつらぬ心とりとらぬ今宵惣太郎が来り  
事白秋よりとらぬのありつらぬむらぎの女郎かるとて  
も側とらぬと和哥芝より少しのひまと見合初會の  
客のぞいた小きたり其人とさしつらぬ見る小とらぬ五十  
余才小て其おの父りつらぬつらぬわんとらぬ肉へけり  
つらぬと三太夫まらつとらぬと見らぬ小成長とらぬと  
つらぬおさかたつらぬとらぬ娘花蔓とらぬとらぬ  
つらぬやとらぬつらぬとらぬ雨のつらぬとらぬとらぬ和哥芝も  
父つらぬとらぬとらぬ何とらぬとらぬたまひとらぬ





父より恨まのしすることをおかれどもまづらうぬれどごを  
見まのしとらうとせしやとのをらうらう物とせしとらひよ  
四ツの袖とせらびりらるやわりの三大夫とせしとせし  
おやうらう恨あらしとせしとせしとせしとせしとせし  
ふしてやめめ女とのしとせしとせしとせしとせしとせし  
とらうをりのをせし後悔し千度願とせしとせしとせし  
せめてとらんとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
とせし先乃女房とせしとせしとせしとせしとせしとせし  
少しとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
其ゆへとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
わひ妻子乃らうゆたしとせしとせしとせしとせしとせしとせし

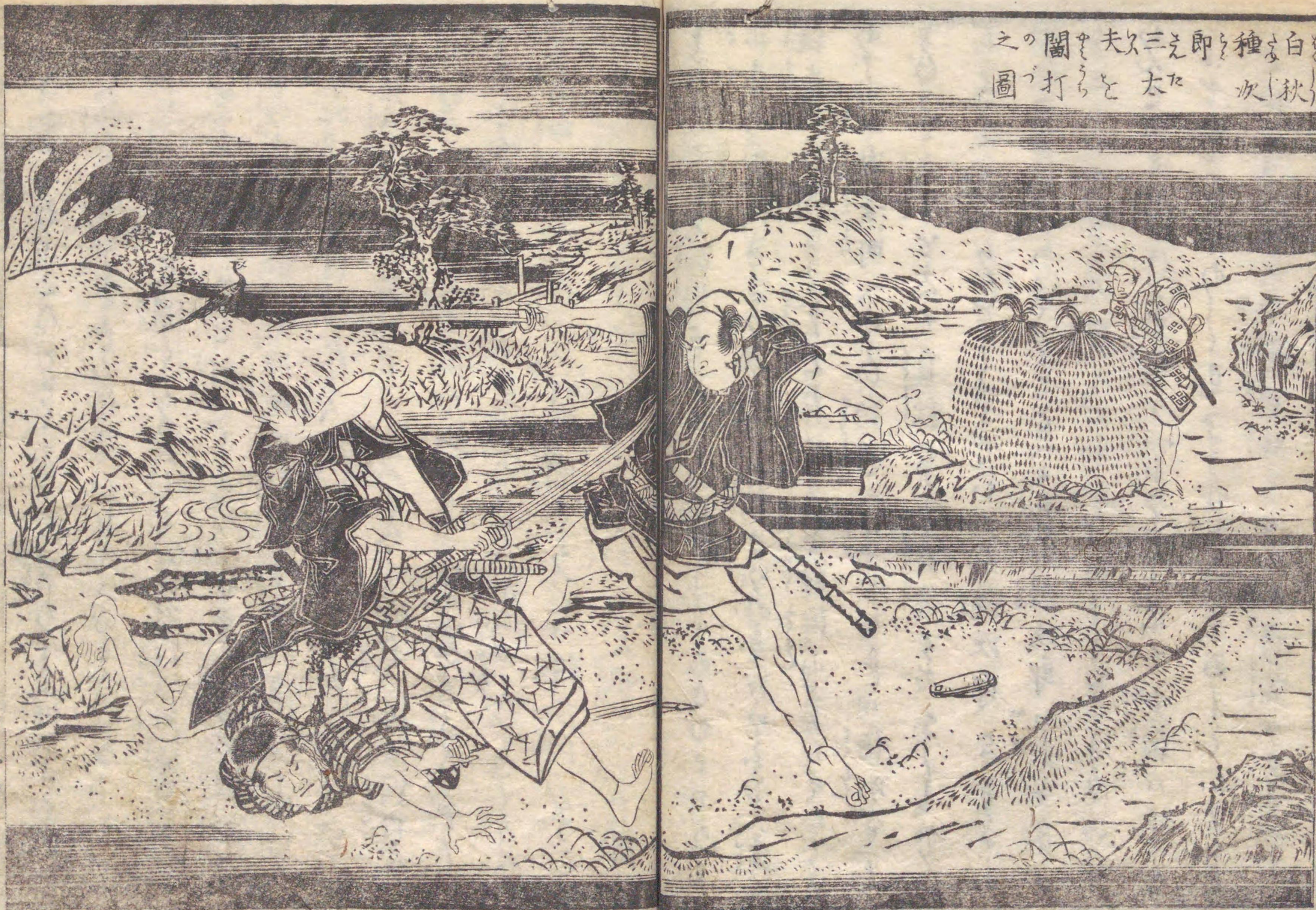
あの人とせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
とせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
もらうとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
うだりてせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
むげした客とせしとせしとせしとせしとせしとせし  
とせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
おそらうとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
人より我父とせしとせしとせしとせしとせしとせし  
とせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
のぞむよ三大夫とせしとせしとせしとせしとせしとせし  
大まよとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし





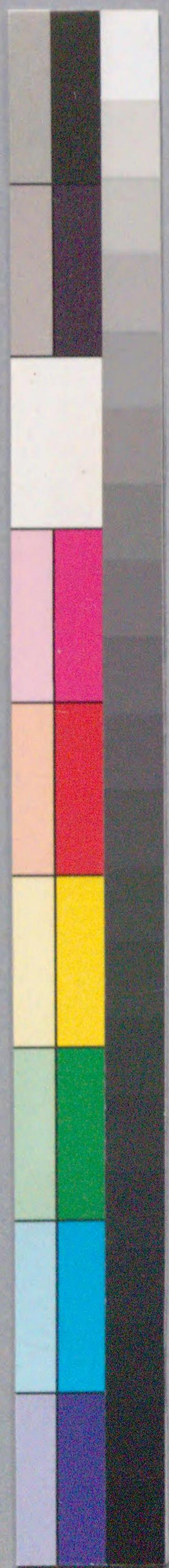






6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50





かゞりごさくわくところごとく小く霄乃まか不ゆとせど  
 是の惣太郎とさきまのひさるひ秘んさいもんさうさう  
 惣太郎も人目と深く志のぶらうら内此所とさきま  
 待ふせいて人さきと討てとてん心さう早く立ちつ  
 うらうら剛悪いざん乃種次郎いとやと死事うけり  
 村のかけよあひ居たま入夜明てつらうらうら  
 うら内うらうらの手まひまわらうら我もよ河内屋  
 ちたかきかつるさうらとあさまさうらひまさうら  
 さきとさうらひまらうら中うらとひ出一刀よらうら  
 うら白秋うらづ死る村乃間よらうら種次郎うら  
 うら行ありふらし河内屋うら三大夫娘といとらうら

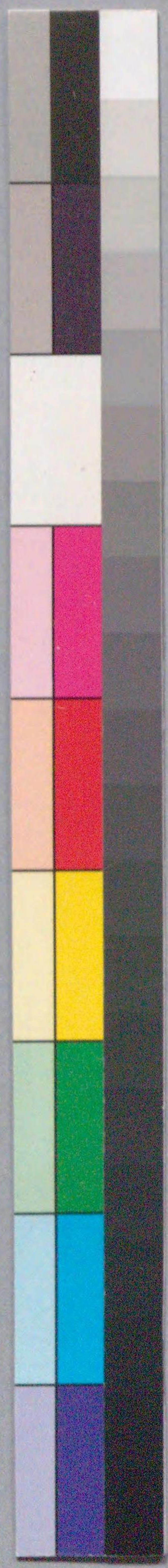
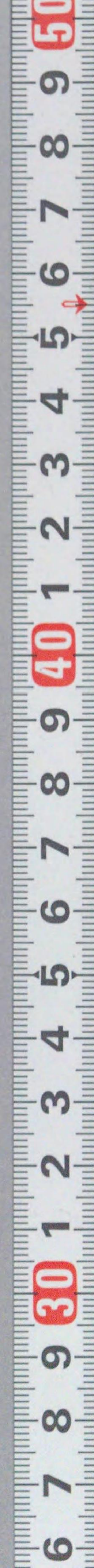
立ちるとさうらとつらうらまらうらふきたまは惣太郎よまひ  
 あとあさとつらきたる三大夫何心あり土手ふさうら  
 まら月乃とさきまは手とあところうら入てかめらうら  
 まんとさきとさうら後うら夫とさきかけ切はれはうら  
 さきとあさうら所よ思ひもらうらるら白秋うら出  
 さまらうらふらうら目早くひらうらとさき右の内うら三  
 きられらうられと事をもせど種次郎が切込身とさき  
 何のあさうらひらうらうらわらうらとさき腰乃刀とめいて  
 二人とあさうら切わら所惣太郎も人目とつら身あれが  
 まらうらうらうら河内屋と立出て我家へうらんとさき  
 うらよ太刀おとさきうらすしとれ一人小二人とて中小とらうら



208  
2  
162

仙家之花上之巻終

切あふていあとのさく立くんとせーが若おひかけらるるを  
ひりた乃其のそをわしてふあうぶべきと是もひるひのかけ  
まのび居てあてうぬるる二人もあうぶどんまぐ三大夫を  
討とあーが白秋のそあうりん右乃耳とそがれりことさく  
はれが其の場と早く立まうつ惣太郎と討としことさく上  
こびり惣太郎もある所よ長居して人ふあやーりらるる  
るハドとひるひのかけり立出てあてとも見ふふ立まうり





杣物語仙家花

下巻

208  
2  
162



杣物語仙家之花巻之下

南杣笑梵清人作

和哥芝惣太郎あびき敵とことろの事

夜明けぬまは磯町の土手小年乃ころ五十あまるところ

田舎侍切殺さしてありよー 評判とてくるま乃ののども

よしもくを見物いゝめさう小や盗人のいざしやうも不便

そのころささし和哥芝惣太郎あびき敵とことろの事

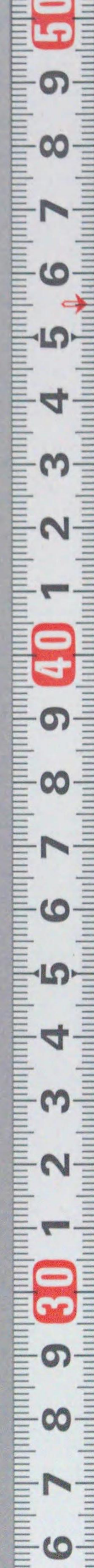
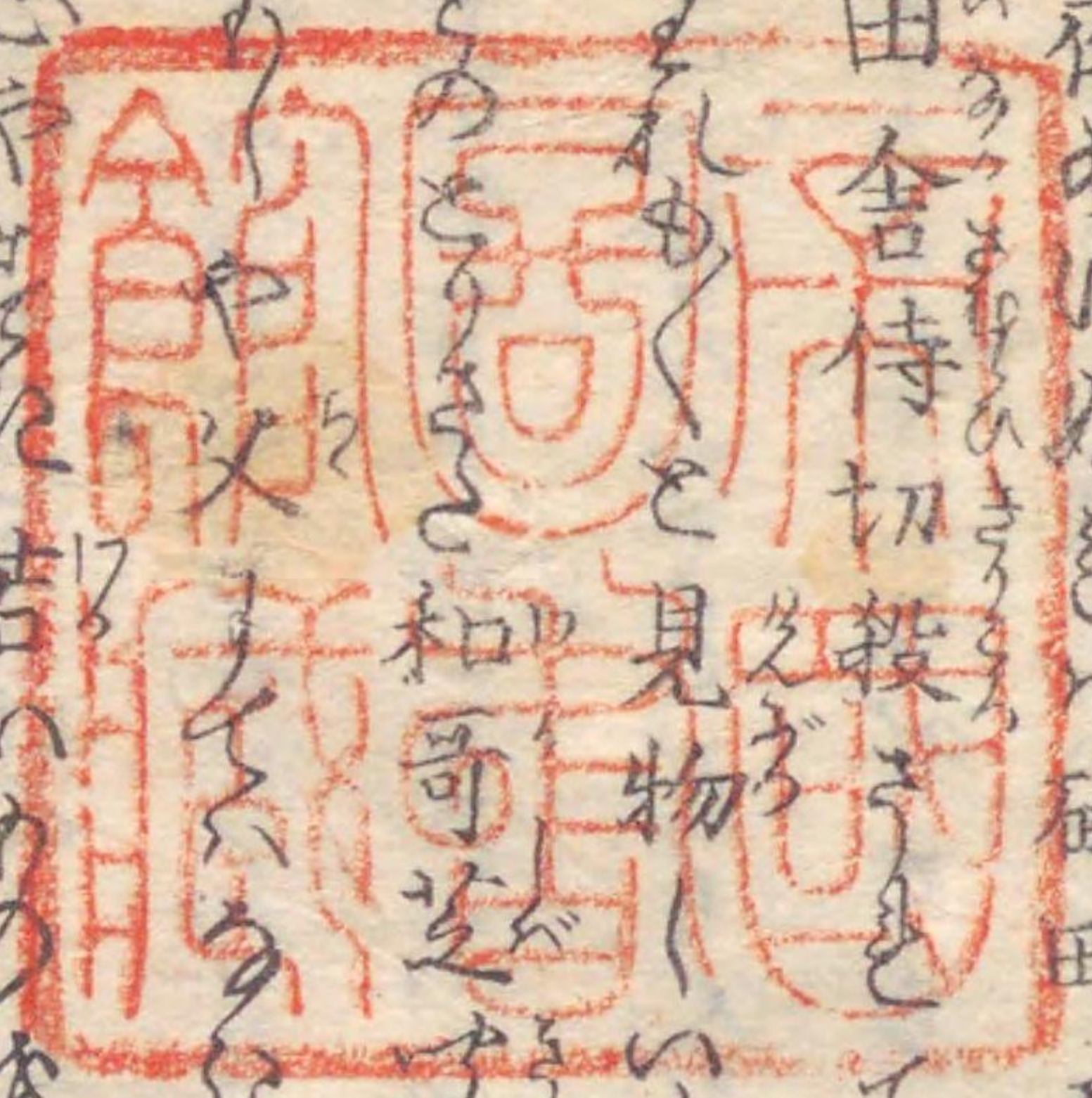
わいやはやとあせんふむひとさう死てさうさう

心やさした若いの依をいらせ見とるよつふもゆへべ乃

田舎客らしくぬるいホまを 偽らりとまあり乃のあをさ

おどろけよりやとん思ひながら心さう福バツを死惣太郎

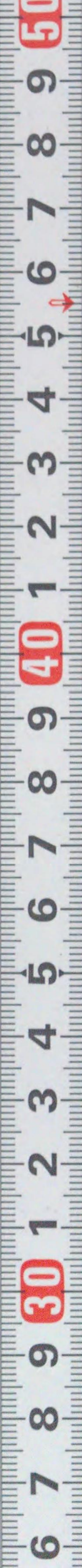
おどろけよりいしとまきさう用事わきとつひとさうさう





今御こしゆへしとひのち小惣太郎も何と云やとおど  
ろれたる物もとりゆをわけきりしげなほてはる人ごり  
人こそあつゆのちうまき事よとあひ出―とさう―大せ  
人たうせ―ゆ―これこそとさ―のどきもあつた―  
ゆへもあつてちうまきとあり―和哥芝が父和久田三大夫  
あつたあつた大きき事うてん―ともあつゆのちうまきや  
さいはんのちとありあつ命とさ―もた―とさゆの成を  
とま―とあせともあひあつ人乃見とあんとあ―と  
とあ―ぬてい―や敵乃てあつもとあつとあれ  
ちうまき右の耳とさ―の血とさ―の中あつ  
とさ―とさ―と大夫小―とさ―とさ―とさ―とさ―

右の耳あつたりのこと敵ありせめて和哥芝があつとあつ  
せんともあつたふあ―とさ―の中―又思ひ―  
とさ―あつた女の事あつた此耳と見てせきとさ―  
事もあつた―河内屋小きたり三大夫の土手あつて  
たりと和哥芝小あつた―とさ―とさ―とさ―  
あつたあつた敵をたつ出―助太郎とさ―  
こげとさ―とさ―とさ―とさ―とさ―  
乃事あつた―とさ―とさ―とさ―  
惣太郎があつたあつた居―とさ―とさ―  
とさ―とさ―とさ―とさ―とさ―とさ―













6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 6 7 8 9

つひ小舟りる種次郎ハ和哥芝と一目見るよりひつらるる  
あてふげうア伯父白秋より申すおのりるをばぐ三大夫が娘  
あて母とも小備中へさし花蔓ありていふ小白秋を  
おとろくともども一らんわれさるるあかき娘とらふとも行あ  
何らくも一ツらんこれまをやりく金銀もつひとをさるれば  
惣太郎と名乗りのとろ和哥芝妻小あぞややくさや  
いづくのたれらうとをめぐしりる

白秋叔父甥あて惣太郎と海へ沈没事

井口惣太郎ハ和哥芝が患よちか居るといひんある  
こと小思ひ毎夜くる人きさうあぐさありきあまうさ  
船の小ていふどのあつとまといんぐ人も三大夫とこそせし

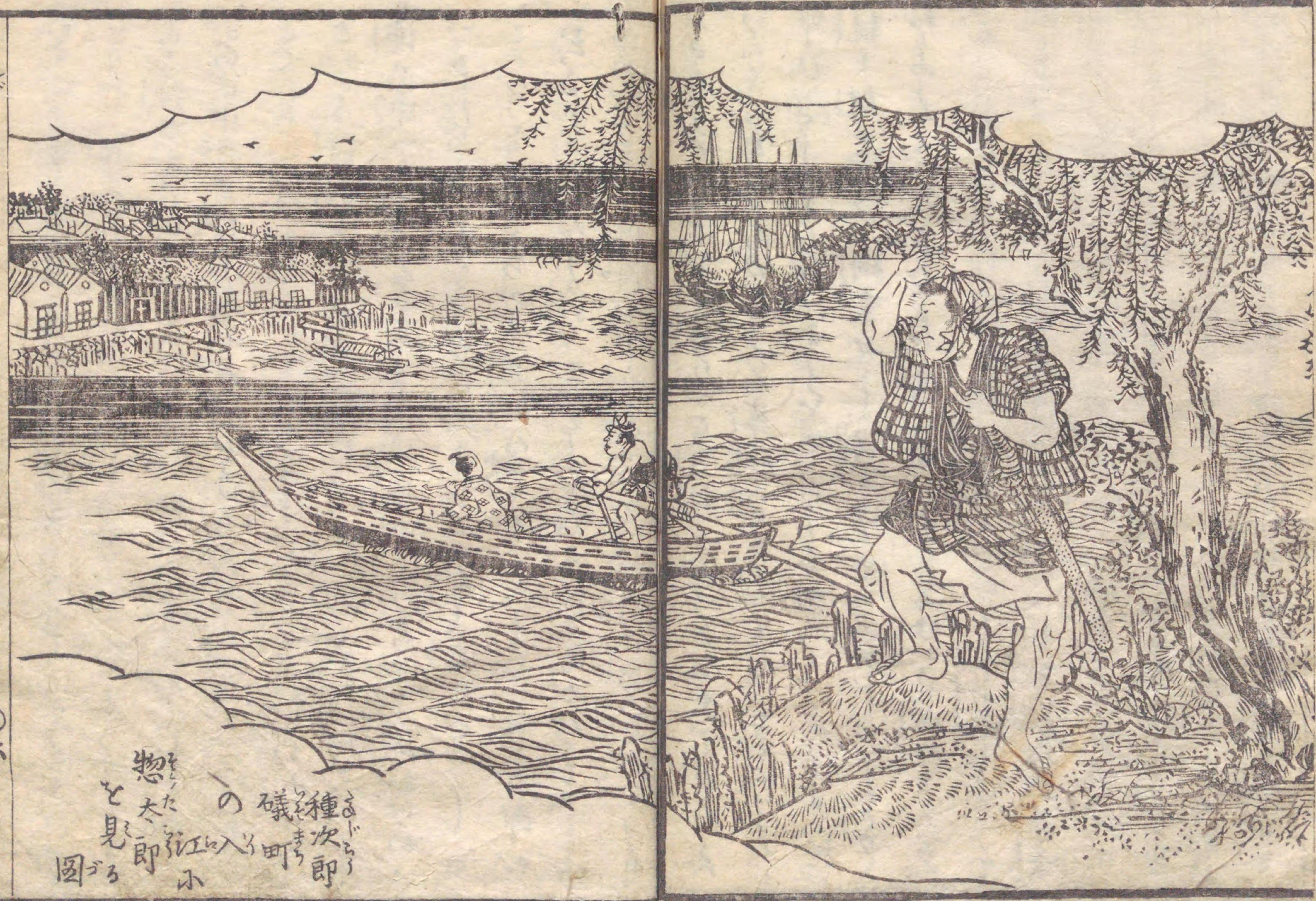
あまひあてまことしうんと白秋がまけりざあぐさあわ  
いづくむ秘んがうひ秘ん事必定あぐさあわあわあ  
あまひがうとあぐさくわしととあしうひさくまをさる世  
親を討と深く絢束せし我もゆるさるささうしりあ  
あやんとユ夫をめぐし其まをさるあひとを曲転とさる  
あまつけくひたむひ小あひわりけ舟人とあしうひ上下あひ  
あまひをさるあまひのさうあひわんのどく白秋種次郎悪者  
あまよとあしうひ五六人あて毎夜くる道のあまらるる  
あまよと惣太郎いもささうとどくあかきとあまらるるあ  
茶屋乃小せんあとなまうとさうあま小まのやりくつら  
あまよとあまのつがふ耳ゆくさうあまのやりくつらあまを

あまよとあまのつがふ耳ゆくさうあまのやりくつらあまを

あまよとあまのつがふ耳ゆくさうあまのやりくつらあまを







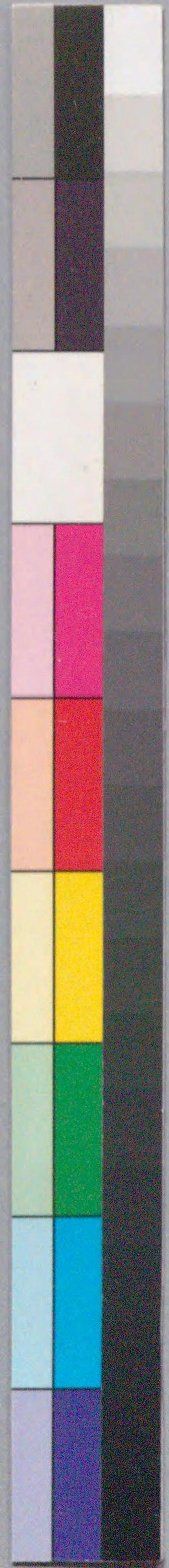
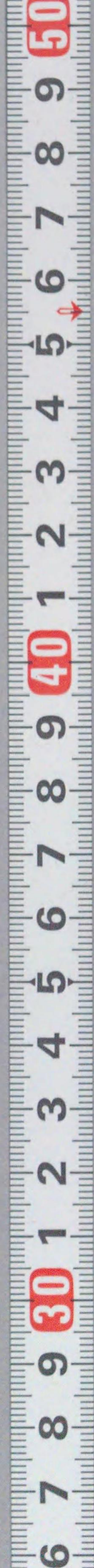
物と見  
 大即  
 江の  
 小  
 の磯  
 種次郎  
 町  
 次郎





かきねふゆゑとりのやとと(と)とてまてまてあつて心とりける  
とらふ一惣太郎いひめてとらふ人とうふと告あつするりの  
あり種次郎いひとまにもと心づき入ると小出ておや舟乃  
ゆび小目と付るふ小ぶひ一とらうらるの上のふくまむ  
さてこそとつけゆく小まてとらうぬあうられが白秋おく  
とから白秋よくこと見えけり明朝未明あうふを  
海乃中つらととらふとまて夜中つらととらふとておらけい  
つきたらふのまかとおめた大きあてんま舟のありしを  
ことりあふうちりの回船乃万とてたまる物惣太郎や  
あつるとまらぬらくさくさく物惣太郎つものひとま  
ゆのづと小河内やと立出やととの舟小のりて出させ

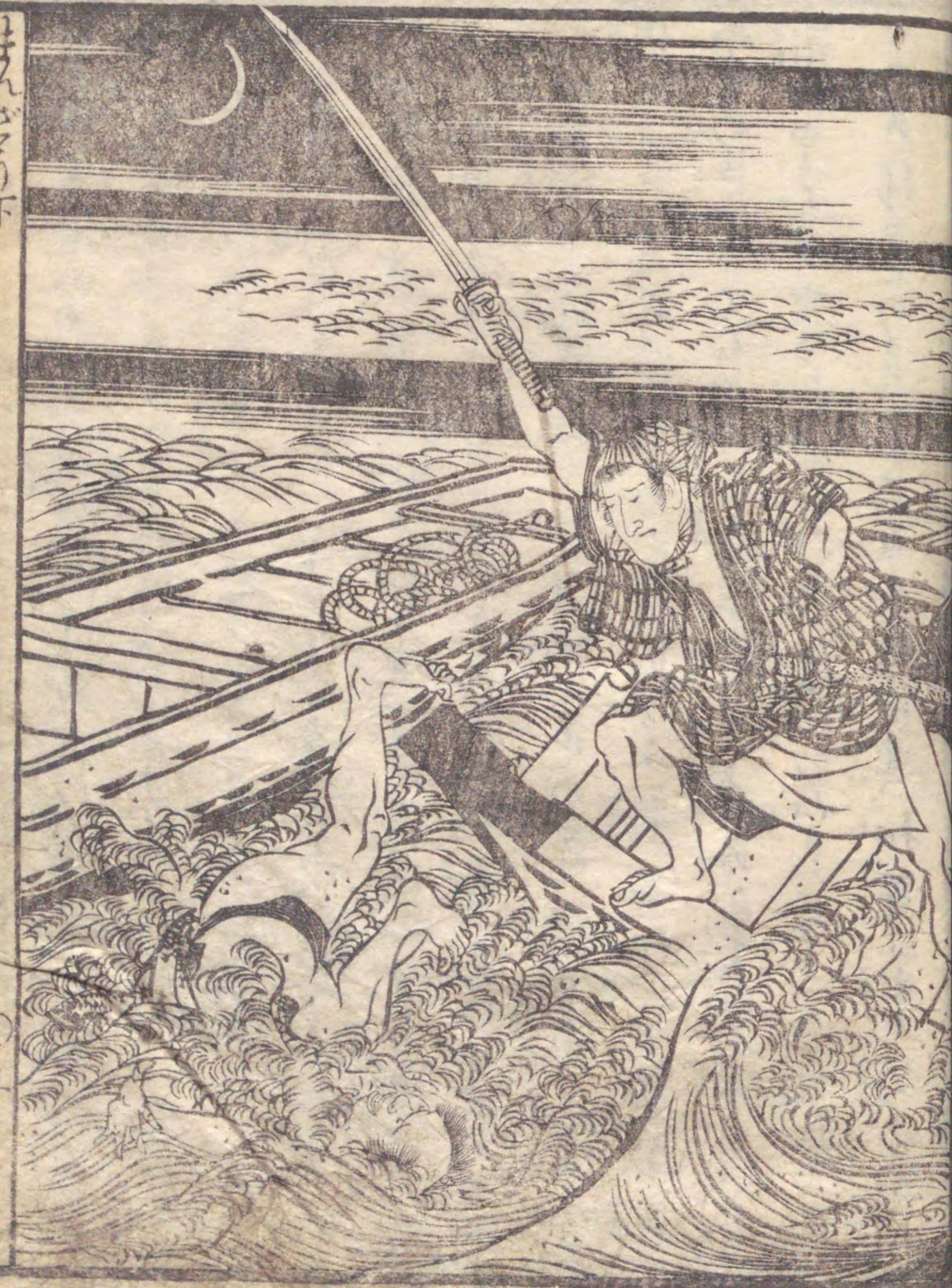
昨日のまてのむづいどあつたまづつふと海上つととを  
あつるこそと出づひのまこつと引上んとするもあつ  
りやかとわけをいしと出るとありいとらふしとてのありら  
らまらとらあち居る所あつてのありふひのあつ  
しう二人のうたるとんまひのたつととまて惣太郎が  
つたるふひ(と)とらとらとらとら二人ともひらととらと  
のうらり一人のあつらよる人と海の中つとを舟人  
水ふるたなる事あまらたわづらひあつたんとせし所と  
ふの者こふらなる大けたてあてとらとらとらとらと  
切さうらる物惣太郎とらうせたと立あつたるがらふふ  
つつけたるあつたふゆつとてとらとらとらとら白秋胸板



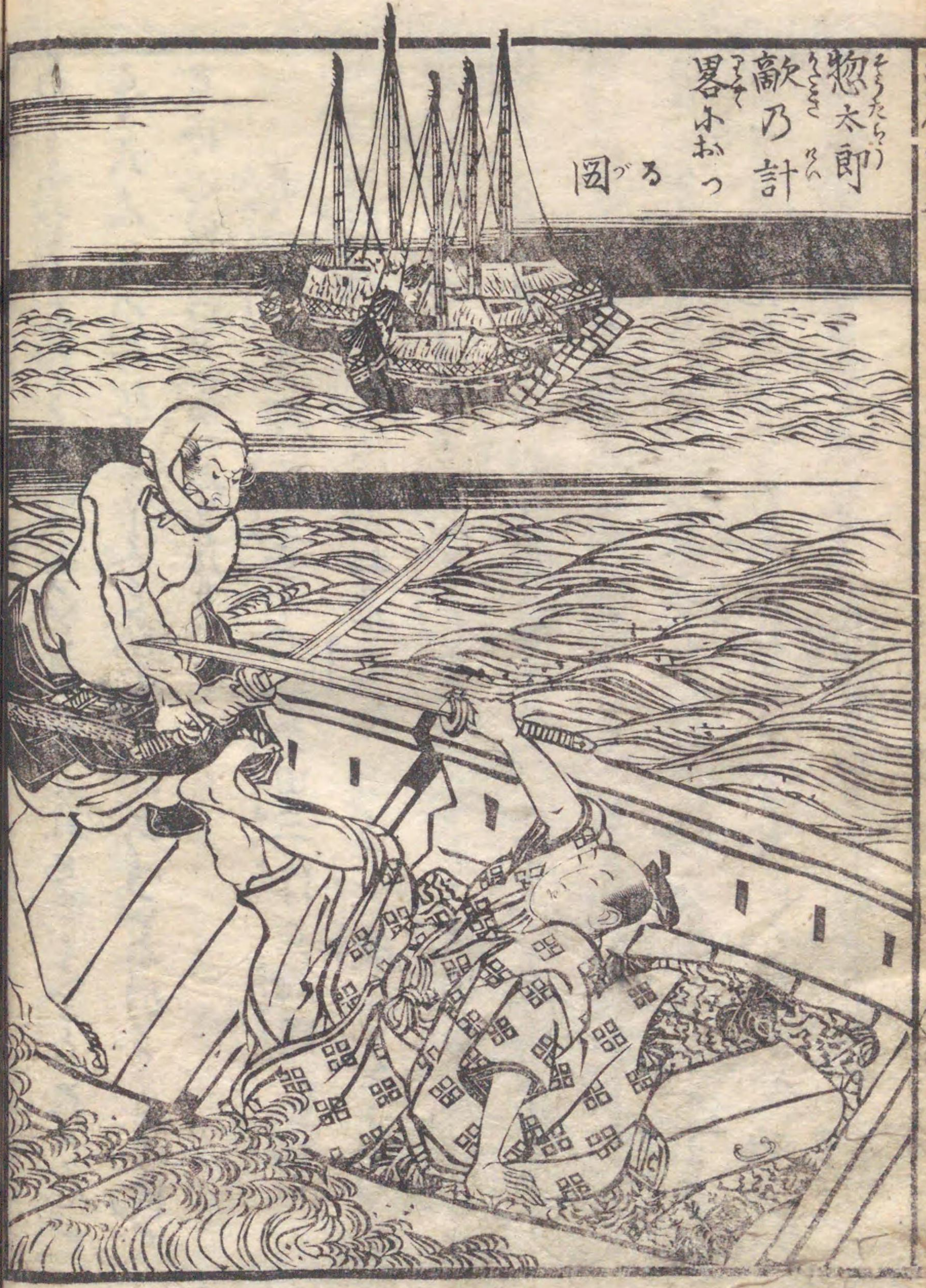




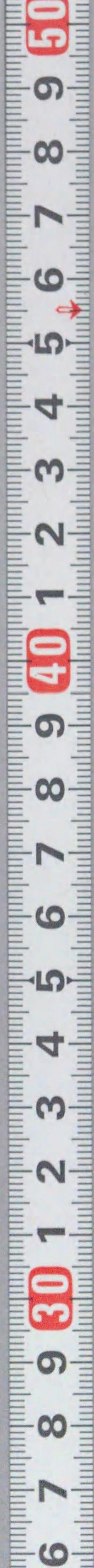




まんごろう下



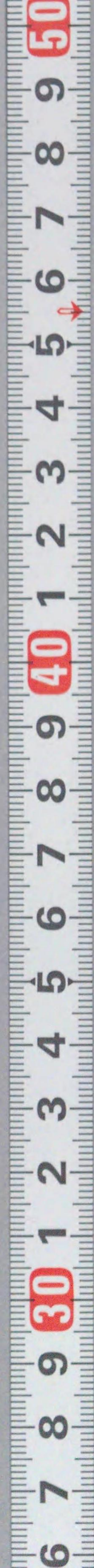
惣太郎  
敵乃計  
畧小おつ  
図づる





よれ男あまびりや助の事由あんとよく水をうらひ  
焚火少てあづかる小定業いまじつさるふやいさめたさ  
中人ろつさる舟人せんどうともめ出ろ子小人乃余を  
助さるば舟あゆせしとよろこびる出ろ子乃ちあひまや  
いとひたさるよとバ惣太郎がいきふたさるさるあぶんと  
十四五里もさる出ろさるさる者さるさるさるさる  
こそ小惣太郎さるさるさるさるさるさるさるさる  
何とさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
少あつさるこれハ井口惣太郎とつろりあてびんどのつそ  
町のやうぢや乃和哥芝さるさるさるさるさるさるさる  
ゆりのゆさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
其和哥芝が父和久田

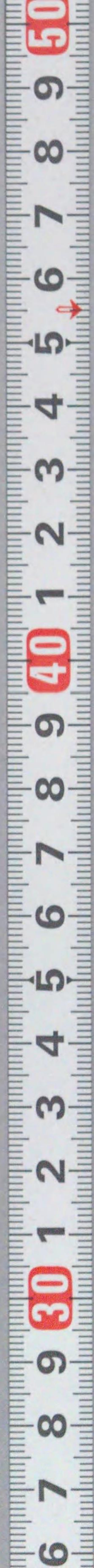
三大夫さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
こそさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
思ひもさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
所を海中つたあさたり水心をさるさるさるさるさる  
さるつたあさんとまとのばせさるさるさるさるさる  
天乃助と取付たりとハおわさる其のらら正氣と失ひ  
引上らるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
まらせむんさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
田船小舟と船頭さるさるさるさるさるさるさるさる  
せんさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
せんさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる





舟番頭ともいふ者惣太郎とありの内いと町の土手  
にて和久田三大夫といひの討とさうとすふあんなかあて  
何和久田三大夫とや我ハ伯耆乃生とて兄を和久田  
三大夫といひけけふひりたせういといひあがう名字ま  
あひさきハ心よかりたることまひりし舟のりさう  
況三大夫本妻ハのらうらう嬢女小たがうとさうさうらう  
とぬらんせう兄弟中あうらう出をうのらう舟のり  
とありたりまんの名ハ三作といひ今三右門と改めさう  
いふ小惣太郎おとらえうハ花蔓ガ叔父乃三作とあり  
おらうけふやうて吐くはあうらうさうさうさうさう  
ふ三右衛門乃名と三作と姓と花蔓とさう知らうさう

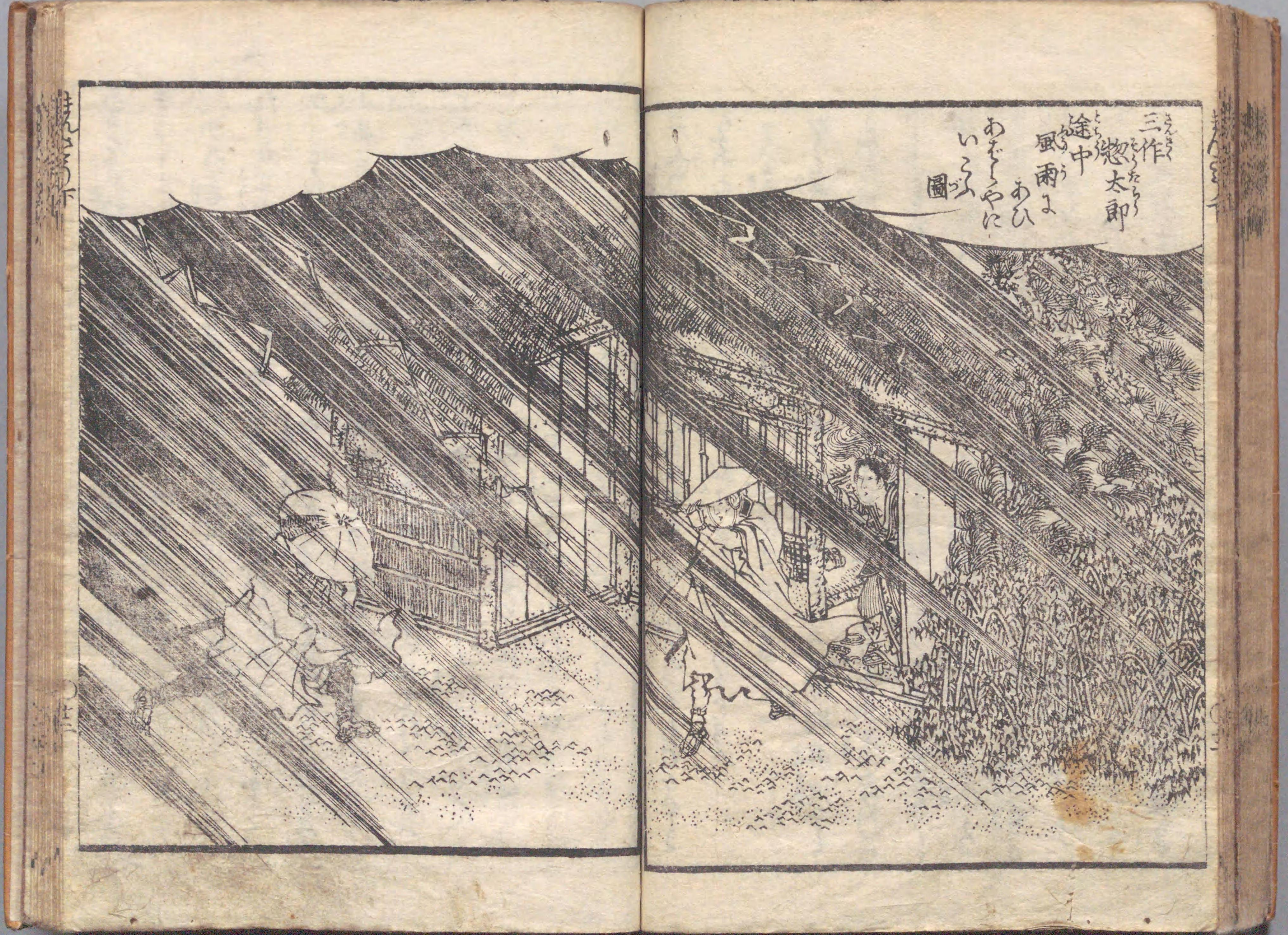
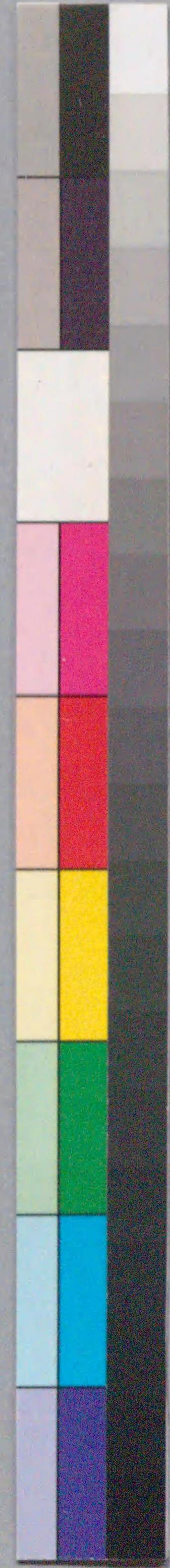
いふハ伯耆抄身ハ備後うらうとや國とさう何とさう  
あうらう惣太郎とさういし町にて討とさう和久田  
三大夫と其方の兄伯耆乃三大夫和哥芝ガ父ありとて  
花蔓小叔とも小備中へさう母乃病と身と勤奉公と  
あうらう事あうらうあうらうと三右門大小おとらえ我兄乃  
あまきことを請れども其白秋とて兄のあてやうわんとん  
あうらう是よりすふびんの國へ同道とて花蔓小といふ  
あうらう小助太刀とてあてを討せんとかさうさうさう  
たふひの物あうらう小日とさうし其夕とさうあうらう  
こて伊勢漆小著岸と其夜三右門船頭官右衛門小引合  
あうらう礼とさうさう二人が身乃さう敵乃事とさうあうらう



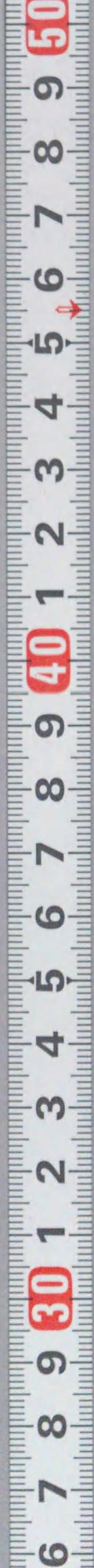








三作  
惣太郎  
途中  
風雨  
あひ  
あひ  
い  
図





あるとすねへ引くえんせしふもろ上乃ふ小家乃わりのうま  
かりくとたごうつりきく二人の雨風小道ともしあひくる  
たび乃者一夜とわさせぬとよ内より五十をうのたき  
たる女立出てうましめんふもろあふぐれがおやぶのてはあふん  
かしものせし思入の我の夫もあの子もあつるふせだ  
小屋乃内たそもあまのうせたりともすむせりののまか  
夜とあつてふまをまもろのうあつてふまを日またりま  
あふくふやうふひ雨のふかき雷乃おとまる追まらぬ  
あふき茶のまご黄たてあふまをくさるふ二人の山路の  
あふきふのうつりきく三里乃山をうのあふひま  
ありと我くあふまをじ乃づつひあつてふまをあふまのがせ

あふきうへもあふたあふまをまもろて今宵ハ御宿祓がひりる  
あふぐ小頼ればさわろバ何あふたもふあつてあふたあふた  
さて足あごあつてせらるあふ二人のうまびいり乃れあふり  
ぬまの物とわが居る主乃女いとまもろあふ新持来つ  
茶をくあふいふの目あふ見うる物あふあつて  
かあふあふの身とれど常の食事あて命とつあふ  
うまもあふ家あてまもろてこそめがしきあふんあふれ世乃  
旅行あこれあふ一食したまんと釋ふて作じたんとあふ  
乃二人のけの食せしまもろうこれのうらとひらえんとするあつ  
土乃こくすあふあつてのんこととさうどあつて茶とあつて  
一ツ二ツ喰うるあふ物太郎はとく和哥あがてあわんと



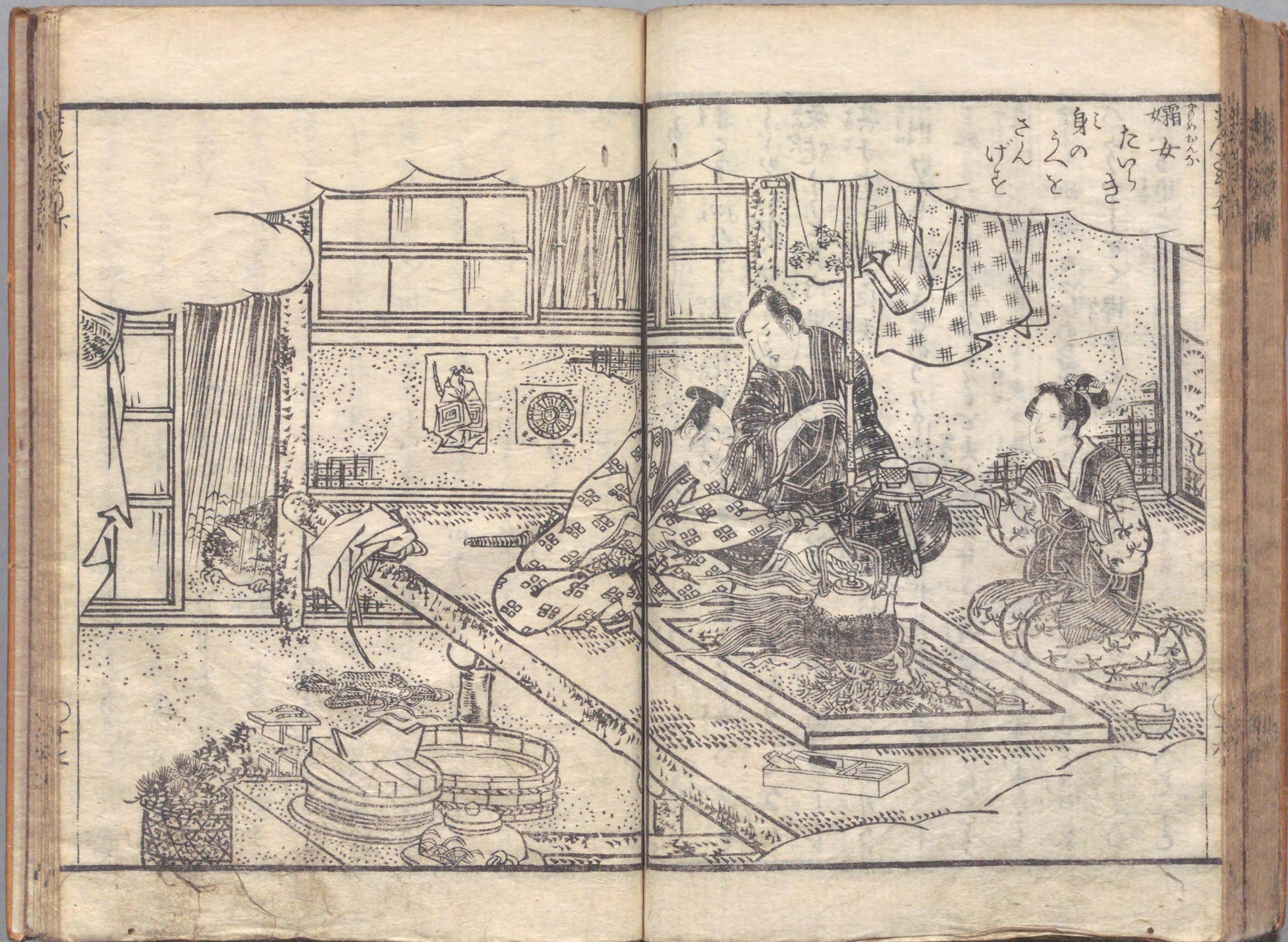




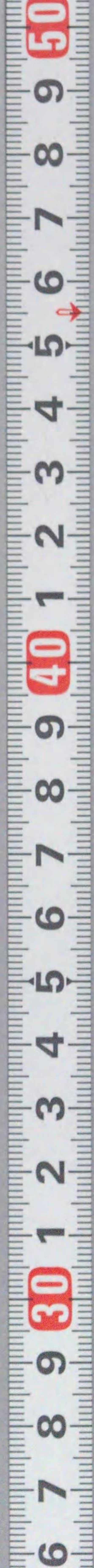








婿女  
身の  
たの  
さん  
げと



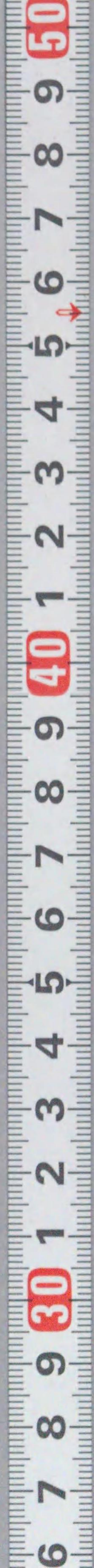


ちうた女乃心うりつゝいとさびひ我ぬけりあることハ西路  
ちうどこまるふせこといそ家の金銀をとりあふまじとかりんか  
さぬぐ乃うんまぢく小人吐の口まをりしるかどふれし  
つひ乃のこもろと病とつらう又ハ親乃家こころるゑぞ  
言てさふげうせ一人もつらりあるかおのづか家業を  
わろがてさうさるれば其かぶと人小ぢりひそある所  
家づらして何者かういもせどわか子こ下女と三人を  
くまひしてさうせうがとく人小うとまれいもれ同来る  
人もなれば自然と心りそかりんとうろ生國伯昏う  
弟乃来る幸ひ小談合せ一故に引こも田地を買夫まで  
やれくもさうとくこり其弟さう肩より腕又突鐘小大蛇の

巻付ありやうのゆる鐘巻の小兵衛とぬかうして世よ  
りてのまささうしゆぶさりのあるとつとんさうと實乃弟乃  
いよはまるせてさうさう引こもる小金銀其外持ゆこ  
諸道具衣類までさうぬさうさう弟はうけおらせしうか  
とくあた女乃身いふさもさうさうさうと和久田三大夫と  
さうさうのと色とりとたがし其妻子其弟までおひ出させ  
思ひのまう三大夫が女房とあり昔乃こさうさうとつとくさ  
連子成長小あさうび取ゆせし小兵衛ふそのまの身りら  
さうさうかひのめとさう父の押よをれ出し出しひそなる  
借金めさうこさうさういよのさうかひめらさうさう三大夫  
めんひ直がて出家とるはさあたらして再家ふさうて終始りて











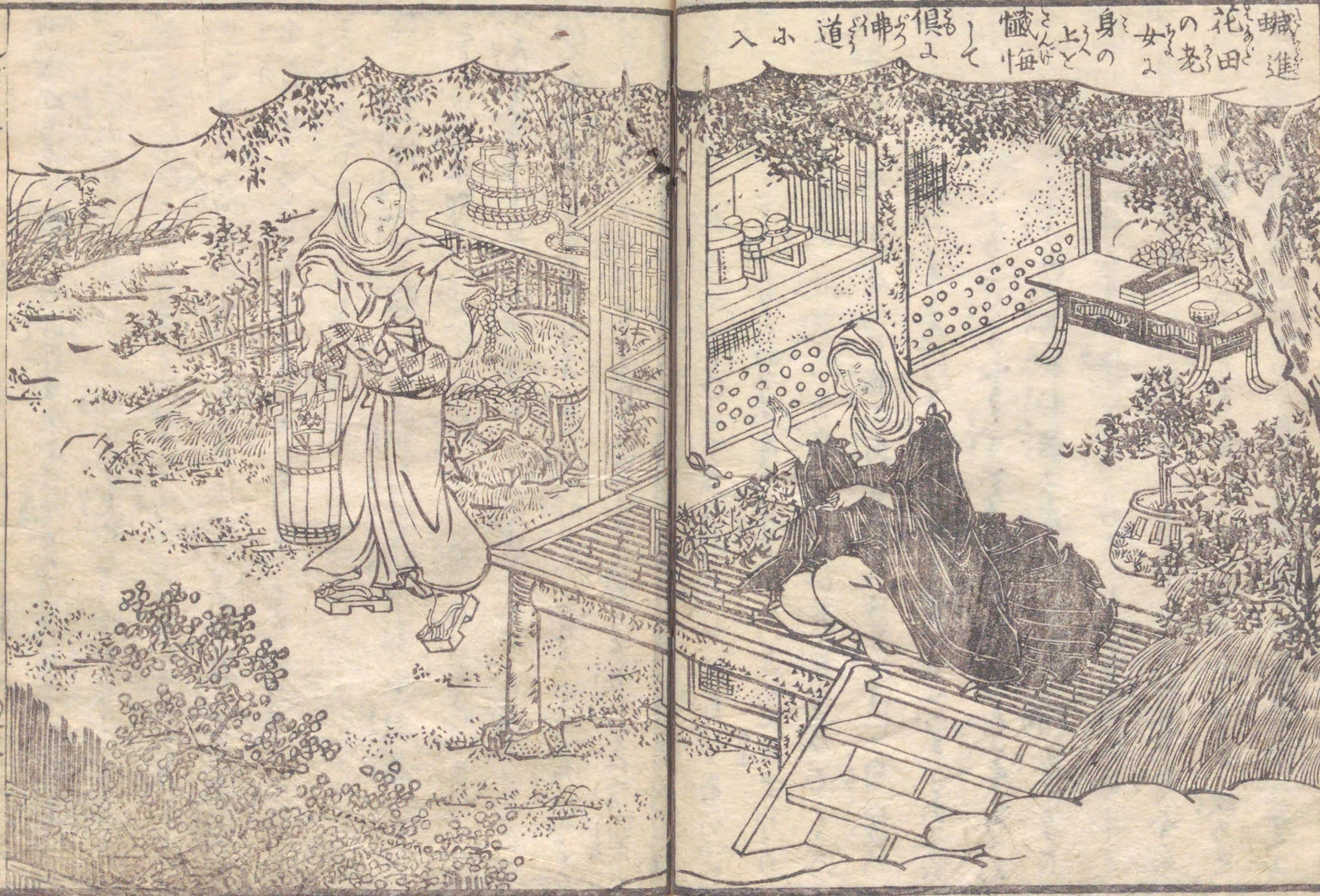


種次郎此事のついでに事あるを只今後悔のうけ  
せしと心得ておきておとすの女もさういふ  
まじらざるをうりのも依見のりしが今の詞さう  
おびてこれある人をせめて三太夫あつさり  
うらた手をあつね夫をいせしめ我らとけよ  
うびのうとゆくと唱うが表のまじらざる  
梅津川の出あさきまじらさる中へび入る三作水  
うらまゝ舟のゆきふのあつてもせむつひて  
上へつる水へつる呑ま命よつるうら物太郎  
これをうらしてげんく我くふれあ身とあけん  
のりまゝ今も今も何のあひのまゝ今もえけ

ことごとく深く悪事とあつて身おれハ来世遠却かあつて  
苦しと請てうらむとあつて早くとあつて死とあつて  
とあつて人々の彼羅の苦患とあつて其身もらむと  
呵責とあつてと腰の帯もらむと白髪乃  
まゝつる髪乃毛うけを切る女も實小とあつて  
先亡の菩提のうら小死とあつて命とあつて  
とあつて思ひ止りける其長物語は夜ハのくと明  
二人ハいとだ乃縁もは縁とあつて又とあつて  
たがひは因果乃程とあつて別とあつて立出る女ハ今  
一とあつて不ひ道ふなりける僧とあつて身とあつて  
備中の國花田乃小杉がむらりける行身乃とあつて







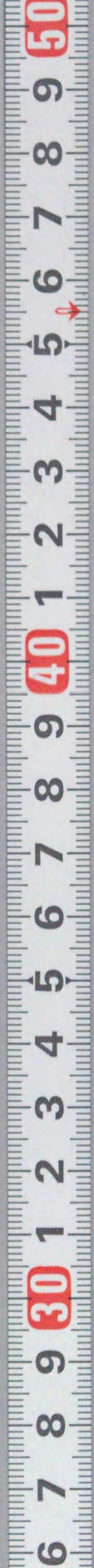


心盛とありし惣太郎三作又あひて尻とあつしむとあつしむ  
の老女もわらへどもつゝ同一く尻とあつてあつてふんさ  
庵とあつてひあつてりりとも中うくのひりてふ手向の花と  
井又ひひて阿伽乃水とく三太夫小枝があをゆんごり小吊ひ  
念仏かこころあくちばちとくいありはれどもおつりめでとく  
大往生ととげつりり。

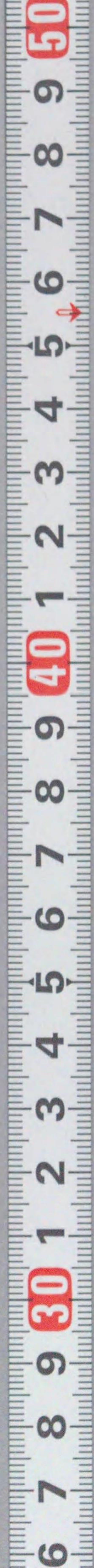
三作花蔓惣太郎敵白秋種次郎と討事

さきバ惣太郎三作たけふ小別が善心小たちううるとん  
一大事とあつりや敵小りときこつん事とおそ夜と日よついで  
びこつてつ我をなせつ家三作りりとも志をくさびたつと  
とあつるるが其内もいじくつてたてめくとあつるるる芝が

うゝしづ身のつがあたゆ井ふしきよ三太夫が弟三作よりうま  
あひ同道とて我家小つら来じと敵乃手つらとあつて  
うゝまをいせとあつて三作りりとも助太刀とあつてつ  
けんまうととげさむべしとひひちりたれい和哥芝これとんく  
惣太郎も死にたりとあつていひくあけさあじくまおが三作  
のうもつとあつていひつりしよのこあまはまうるふことあつり  
あく又敵もあつて討せんとあつていひくあつてあつてあつて  
あつていひく其夜いひてあつていひくあつていひくあつて  
あつていひく其夜いひてあつていひくあつていひくあつて  
三作とつていひくあつていひくあつていひくあつていひく  
和哥芝惣太郎とあつていひくあつていひくあつていひく







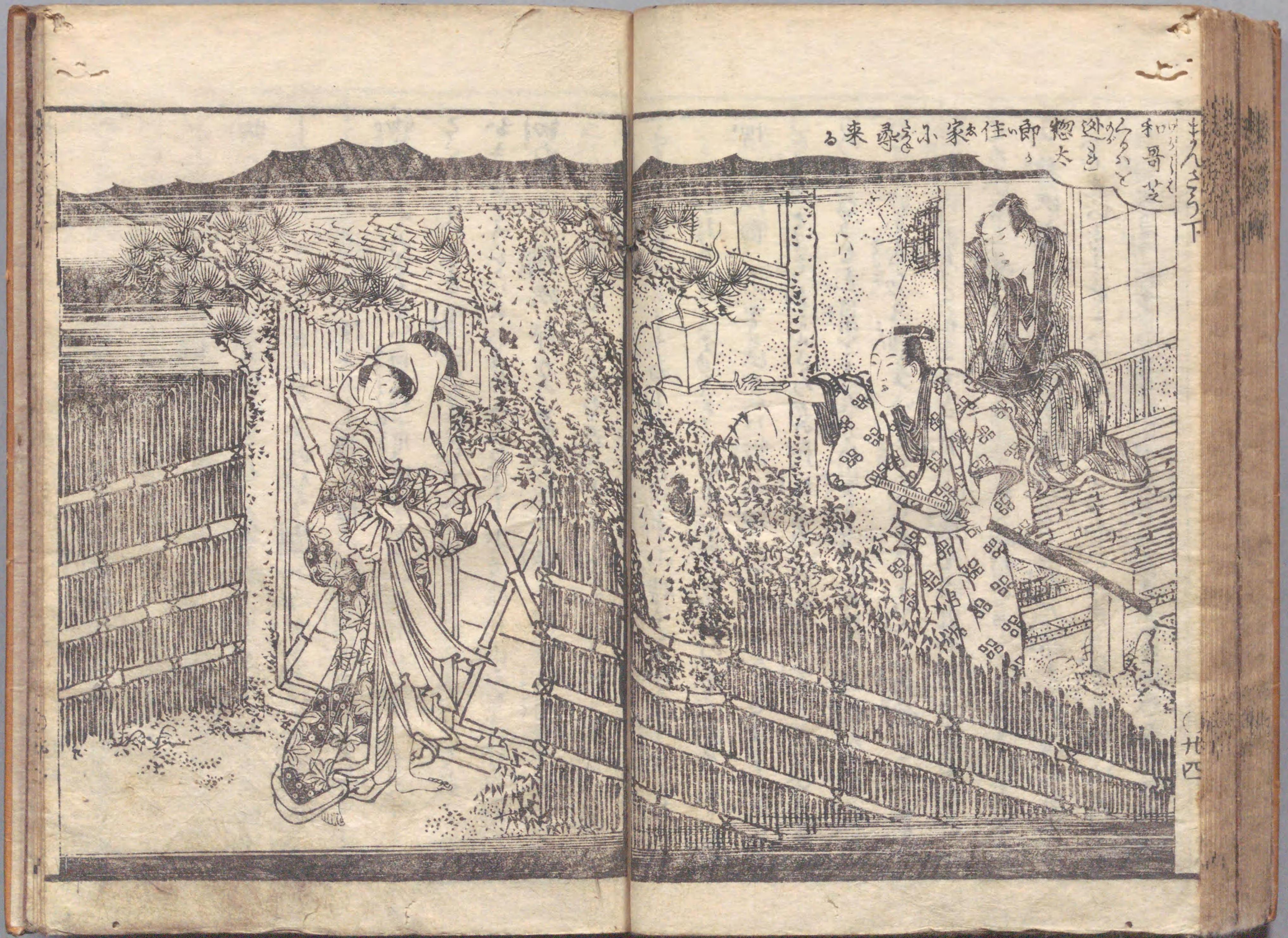
まゝ下

〇九三

定め内手付とて金百両これこそ三作がたくはへし金と船頭  
 官右門よりひの金をのりせて佐左門小りて跡金二百両  
 十日かとうとやとて若延引せば手附の金ぞとて和哥芝と  
 ことをいひとけいせとてわめとてわらうわらう物太郎心  
 おちのきりうもむ白秋のあひのまゝ小島乃仇人井口物太郎と  
 海よりつり今心やとて耳乃いゆゆはまらとて毎日うらひ  
 さめぐ心をつくととて和哥芝の父とてとて夫よせん  
 思ひて物太郎のうらむ行へまをどわとてあゝげと  
 又病を生し見せし物出とて何ともとてやうとて心とて  
 わづら所とてせとて物太郎とてうらむとて金百両身請金  
 乃手附とてとて金十日限のやとて和哥芝と引取

うらむとて物太郎のうらむとて手小持のうらむとて  
 ございし物太郎のうらむとて物太郎のうらむとて  
 物次郎のうらむとて物太郎のうらむとて二人よ切とて  
 と始りて手よらり物切とて和哥芝とてうらむとて  
 りてうらむとて菓とて人よ安とてとて白秋をいひ  
 つとていふとて詞とて其とてとて其夜とてとて  
 種次郎のうらむとてよまご骨り家とて立出て物太郎が  
 ちのびとて庭のうらむとて乃肉よかたれぬてやうとて  
 又種次郎のうらむとてのうらむとてびつとて家乃肉よ小  
 へとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
 居合せとてあゝとてあゝとてあゝとてあゝとてあゝとて





和歌  
の  
大  
惣  
郎  
住  
家  
小  
尋  
来

廿四







まゝさう下

地五

あり用心のどとふとたえんきあり鬼神もせよゆえんして  
 わる所へ思ひもつて討つらんよやううろとどとつて  
 わぶらうど我まが其三作ふまらてかぶらういづれなる  
 惣太郎討つてかまぢとととて我よかとあせしと約束  
 して今やわんをとんぐよのひり障子乃やあせしと眼も  
 三作ハ手枕もて様よふ惣太郎ハ和哥芝がひごと枕とて  
 惣語してわらうて白秋一目見らう念たふひうとて  
 こゝらまことを障子けしとんてり三作よきうてかた三作  
 おまらうとてあやうけらうてぬれあせうけらうて  
 切ゆひる種次郎のどとつて惣太郎小切付と惣太郎  
 二人をまらと見てとんや天乃あせとんあせ和哥芝が親乃

かたをいらく運乃つては所まで討つよきことを  
 くれいでく勝負とつてまらうとてあせとて火を  
 とつて種次郎が面と心とてうらつて小灰四方らて  
 たらうひまよ手早くとんよままひあせとて  
 刀をいづりつてむしあせつて種次郎の茶を  
 ちて討つて血をどとつて眼をひら  
 惣太郎が切む太刀をらうとてわらうた二ヶ所まで切  
 らうとてとふげ出せらうとてとてとてとてとて  
 とととととと物太郎おととととととととととととと  
 とととととととと種次郎羊半生小とととととと  
 かつらうとと物太郎三作のふやとやうとととととと

〇七





白秋とうちのひたひよ手もおどろき種次郎とて其まゝ  
 母と白秋よりしるうりまゝてめる白秋のまゝぬ所これまゝ  
 をとどとりまゝ小二人とわいては死身よりて切あひりる  
 和哥芝いこれとててて手小あやぬのまゝらてわたりしと  
 惣太郎心づきやまゝ和哥芝おんまゝ父和久田二大夫を  
 人まゝひまゝひあがしりて町乃土手あて切害せしはひまゝらの  
 小兵衛あゝぞ早く享り親乃のたれと討べしと刀とりしはれが  
 さてはらうへい白秋がころせしよなりのふもひこみ  
 るたれをまゝころころのあいのひよしとめりてまゝらふまゝ  
 けしは仁神のまゝが孝心とあてまゝにまゝ御加護おやまゝ  
 女乃一念しりし白秋がかりり右のうらまをとりまゝとまゝ

白秋丸の手ふかそうまゝとてする所をまゝしたの  
 うまゝつげうちまゝおとせがこれとてと作太刀とひこ  
 ちあつちまゝとてはよとて見物を白秋むねんのまゝら  
 あしとひつんとまゝ所とり芝白秋がむねとまゝらとて  
 りんごのあひまゝとてつゝぬののあつてとてびらおとてまゝら  
 まゝらうちとて今一人とてあつちけお種次郎がまゝら  
 きんとまゝらとて二作まゝとておとてまゝらあつちまゝら  
 まゝらあつちまゝとてまゝらまゝらとてまゝらとてたの  
 びらわとておとてまゝらまゝらとてまゝらとてまゝらとて  
 紀乃ら手負種次郎とかしとてしとてまゝらとてまゝらとて  
 あふおと鐘巻小まが積悪ゆのまゝらとてまゝらとて白状し

白秋丸の手ふか

白秋丸の手ふか







6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50

けり小麻多きとも灸所とあり切是しゆくやをたかく  
くしと炎あをぬくしゆく則武士三人の者とも伴ひて  
あると披露あり花はあご目何某甚感心ありいと町の  
遊女屋河内屋佐たると山呼出あり惣太郎と其方  
召し人の花女和奇と宿よとわ妙といふとさき小付  
今日までのわけ代きと筆用し相もひまうきと  
と信しこれ多由人物惣太郎揚代のをと持出河内屋の  
請取をり此辰やよるに又信付らるハ佐左衛門花女の  
揚代請とるふ先達て三作がけとせし百あの手付金  
おしくやとてをわり花は河内屋せひあし金百あき出と  
あご目との金とまふおと其の物相和奇とさきこれまを

久くをり余よの金子とのわけることかき娘とあり  
惣太郎がかきと付つるごとく一個は百あきとて各付  
らるとありやうと人をとくし多の三作はけし主人河内屋  
のりやうと其船頭に信付らるる別し惣と和奇  
是と親乃款首尾よく討おせしはむらびとて白きん  
百牧らとやうとわらぶとらむらむはるるいとこのあま  
信不しゆくしゆくおとらるる熱たし和奇とさきらんしと  
夫婦中しゆく家とさきとさきとさきとさきと

杣物語 下ノ巻終



〇七二



208  
2  
162



文 化 五 辰 春 新 刺 繪 草 紙 總 目 録

繪入 於國歌舞妓濫觸記 山東京傳編  
讀本 本朝醉菩提 歌川豊國画

敵討 天竺徳兵衛 全部 山東京傳作  
六册 歌川豊國画

左甚五郎蛇淵仇討 全部 山東京山作  
六册 歌川豊國画

三五兵衛 復讎川字線由来 全部 山東京山作  
六册 歌川豊國画

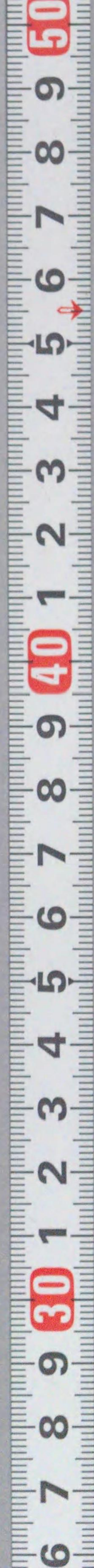
金比羅 敵討乗合 全部 姥扇輔作  
六册 歌川国貞画

御利生 南山笑 杉物語仙家花 中本楚満人作  
遺稿 三卷 歌川国貞画

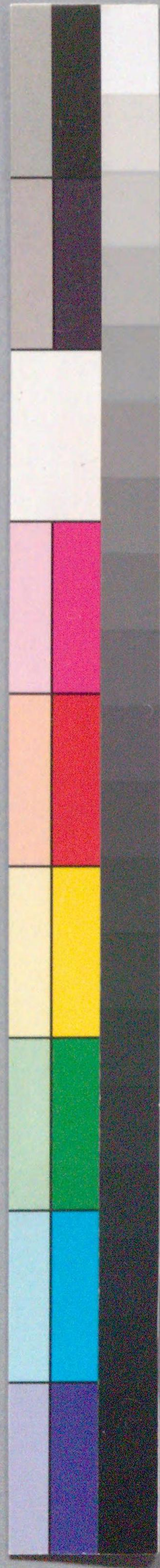
右のちり紙出来 江戸地本回屋 伊賀屋勘右衛門  
賣出しヤ枝



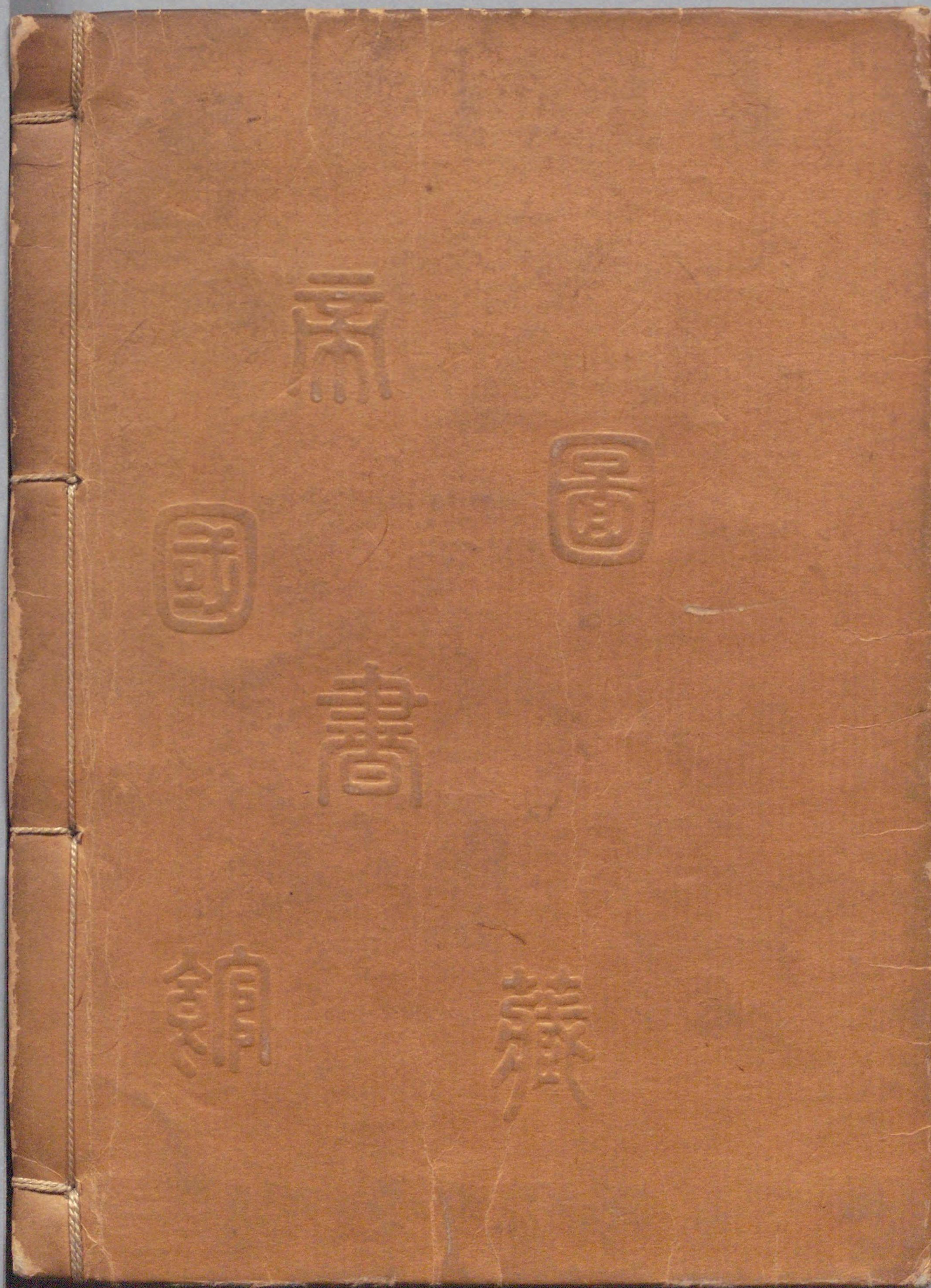
208  
合1  
162







国立国会図書館 仙物語仙家花 2巻 208-162



ガラス使用

